

5. 資料目録

アメリカ北太平洋測量艦隊（1853—1856）による海図とその目録…………… 後藤敦史

幕末期に来航したアメリカ船については、ペリー艦隊がよく知られているが、つづいて来港したジョン・ロジャーズのひきいるアメリカ北太平洋測量艦隊については話題になることが少ない。ただし当時の東アジア航路について重要な測量をするだけでなく、日本の沿海測量におけるその意義も大きい（『幕末外交談 1』平凡社東洋文庫）。アメリカ議会図書館と同国立公文書館で同艦隊の手描き海図の調査を行ってきた後藤さんに、その概要の報告をお願いした。

アメリカ軍作製の沖縄地形図—解説と L893 図（1:4,800）の目録—…… 小林 茂・小林 基

近年、第二次世界大戦期およびその後の時期のアメリカ軍作製図に対する関心が高まっている。ただし、その全体像についてはさらに調査すべきことが多く、また作製された地図についても目録の整備が不可欠である。沖縄について、作製された各種の図を展望するとともに、広域をカバーする大縮尺図の目録（ただし一部）を示した。

北清事変に際して作製された 2 万分の 1「山海関」地形図（大阪大学蔵）

—解説と目録—…………… 小林 茂・小林 基

日本軍は日清戦争期～日露戦争期以後にかけて中国大陸と朝鮮半島の各地で 2 万分の 1 地形図を作成した。その多くが戦時測量によるもので、戦跡や戦略的要地が対象となっている。山海関に関連する 2 万分の 1 地形図は、北清事変（1900 年）に際しての戦時測量によるものではあるが、要地としての山海関の評価と並行して作業が行われた点が注目される。

アメリカ北太平洋測量艦隊（1853－1856）による海図とその目録

後藤敦史（大阪観光大学）

はじめに

1855年5月（安政2年3月）、開港地下田に2隻の測量艦が来航した。司令長官ジョン・ロジャーズ（John Rodgers）率いるアメリカ北太平洋測量艦隊の旗艦ヴィンセンス号（*Vincennes*）と蒸気艦ジョン・ハンコック号（*John Hancock*）である。筆者（後藤）は前稿において、この測量艦隊の来航が、当時の徳川幕府の外交政策に大きな影響を与えたことを明らかにした（後藤 2012）。一方、測量艦隊そのものについては、これまであまり注目されてこなかった、ということもあり、その具体的な活動内容など、解明すべき多くの点が残されている¹⁾。

北太平洋測量艦隊の活動を明らかにするためのひとつの大きな手がかりとして、同艦隊によって作成された海図が考えられる。筆者は、2010年9月中の2週間、および2011年8月～9月の2か月間、アメリカ議会図書館とアメリカ国立公文書館で、測量艦隊にかんする諸史料を調査する機会に恵まれた²⁾。このときの調査によって、測量艦隊によって作成された海図類も閲覧することができた。

そこで本稿では、測量艦隊の活動にかんする「全容」の解明については今後の課題としつつ、同艦隊の活動の一端を示すため、筆者が調査した海図の目録を紹介し、それにより明らかになった点について説明を行いたい。先行するペリー艦隊の海図との関連性など、再調査が必要な点も多々あるが、測量艦隊によって作成された海図の目録そのものを紹介することも、十分に研究上の意味があると考えられる。

以下、行論においては、アメリカ合衆国と太平洋とのかかわりを論じたうえで（I章）、測量艦隊の派遣の経緯を簡単に検討し（II章）、最後に同艦隊による海図の目録とその詳細について解説していくこととしたい（III章）。

I. アメリカ合衆国と太平洋世界

欧米諸国が太平洋世界において本格的な活動をはじめたのは、18世紀のことである³⁾。ロシアが派遣したヴィトウス・ベーリングの探検隊（第1次探検隊 1725-30年）にはじまる、欧米諸国による太平洋探検は、ラッコ毛皮の商品的価値の「発見」がその大きな契機となっている。ベーリング艦隊によるラ

ッコの「発見」で、北太平洋にはロシアの毛皮交易船が多数進出し、さらにイギリスのジェームズ・クック探検隊の航海記が1784年に公表され、ラッコの存在が広く知れ渡ったことで、太平洋は一举に欧米諸国による競争の場となった。北太平洋で獲得した毛皮をいち早く中国市場で売りさばく、という欧米諸国の商船の「流れ」が形成されたのである。なお、その経路の中継点にあたる日本列島にも、多くの外国船が接近、あるいは来航し、徳川幕府の外交政策に大きな影響を与えることとなる（平川 2008）。

毛皮交易そのものは、毛皮獣の減少によって19世紀に入ると衰退していくこととなるが（木村 2007）、それに代わり、今度は捕鯨業が盛んとなった。とくにアメリカ合衆国の捕鯨業は、独立戦争以降、イギリスのそれを抑えて、太平洋における中心的な位置を占めるようになる。

1810年代には、日本列島近海がマッコウクジラの豊富な漁場であることが「発見」され、それ以降、この「ジャパン・グラウンド」にアメリカやイギリスなどの多くの捕鯨船が進出することとなる。さらに、鯨の頭数の減少にしたがって、漁場は北へ北へと移され、1848年にはアメリカの捕鯨船がベーリング海峡を抜けて北極海にまでいたった（Tower 1907）。この頃になると、アメリカの捕鯨船員が日本に漂着するという事件も頻発するようになる。

以上のように、18世紀以降、欧米諸国による太平洋進出が続くなか、測量も含めた太平洋の探検事業が積極的に進められることとなる⁴⁾。上記のベーリング探検隊やクック探検隊に加え、フランスでは、ラペルーズの探検隊（1785-88年）が派遣されている。

ラペルーズ艦隊が千島列島近海を探索したように、環太平洋に位置する日本列島もまた、探索事業の対象地であった。クックの探検隊に同行していたイギリスのヴァンクーバーによる探検隊（1791-95年）は、北アメリカ大陸太平洋岸について「キャプテン・クックを凌ぐ最高精度の海図を完成させた」といわれている（木村 2007: 173頁）。そのヴァンクーバー探検隊をなす2隻のうち、チャタム号の船長であったウィリアム・ブロートン⁵⁾は、1795年から98年にかけて、サハリンから揚子江にいたる「北太平洋で

唯一遺された空白地域の測量」を実施し(横山 2001: 274 頁)、その途次、1796 年に室蘭に寄港している。彼はその後、日本列島の太平洋岸を測量しながら南下していった。

このようにイギリス、ロシア、フランスによる太平洋探検事業の歴史から考えると、アメリカ合衆国による太平洋探検は、やや時期が遅い。アメリカ海軍により、チャールズ・ウィルクス率いる太平洋探検隊が派遣されたのは、1838 年から 1842 年にかけてのことであった⁵⁾。

ただし、時期としては他の西洋諸国に遅れたとはいえ、旗艦ヴィンセンス号をはじめ、合計 6 隻の軍艦からなるこの艦隊は、「それまでの国も送り出したことのない、最大規模の海洋探検隊」であったことに特徴がある(ペリー 1998: 95 頁)。中～南部太平洋と南極海、および南北アメリカ大陸太平洋岸を踏査し、動物や植物の標本など、太平洋にかんする膨大な情報を本国にもたらしたウィルクスの業績は、以後のアメリカによる太平洋進出の前提となったといっても過言ではない。実際、アメリカ北太平洋測量艦隊も、このウィルクス艦隊の「遺産」を継承しているのである。

II. アメリカ北太平洋測量艦隊の派遣

1840 年代は、アメリカ合衆国の太平洋政策にとって大きな画期となった時期である。まず、1844 年に清国と間で締結された望厦条約によって通商の拠点を拡大させたことは、東アジア地域におけるさらなる商業的發展を期待させることとなった(Johnson 1979)。そこに、アメリカ大陸太平洋岸への到達という動きが重なった。ポーク大統領政権の下、アメリカは 1846 年にイギリスからのオレゴン割譲を実現し、1848 年には米墨戦争の結果としてカリフォルニアおよびニューメキシコを獲得したのである(山岸 1995)。蒸気船の技術向上と相まって、ここに、太平洋航路の開設による中国市場への迅速な到達と、それによるイギリスとの対抗という課題が、高い現実性を帯びて急浮上することとなった。

こうした太平洋航路の開設計画をいわば正当化する役割を果たしたのが、捕鯨業であった。鯨数の減少とともにアメリカ捕鯨船が漁場を北方に向かって次々と移していったことは前述した。しかし、北太平洋海域については正確な海図もなく、難破する船も増加していた。このような遭難するアメリカ人たちの保護という問題が、当時のアメリカ政府に突き

つけられていたのである。その一方で、この捕鯨船員の保護という課題こそが、莫大な費用を要するであろう北太平洋航路開設計画に「大義名分」を与えることとなった(ペリー 1998: 143 頁)。

ペリー艦隊の派遣とは、まさに太平洋蒸気船航路の開設と、アメリカ捕鯨船員の保護という二大事業を目的としたものであった。中国市場にいたる航路上に位置する日本列島は、薪水や食糧の補給地として、かつ、漁業に従事するアメリカ人の避難港として、「開国」させる必要があったのである。

そして、北太平洋測量艦隊の派遣もまた、太平洋航路開拓と捕鯨船員保護という目的と密接にかかわっていた。この派遣経緯についてはすでに(後藤 2013)でも述べたところであるが、もう少し詳細にその経緯を追ってきたい。

1852 年 1 月 21 日、上院通商委員のウィリアム・ヘンリー・シワードより、北太平洋海域の海図作成のための艦隊派遣を提言する議案が提出された。それは、「中国を往来する航路上にあるベーリング海域、中国海域、ガスバル海峡、ジャワ海峡という、捕鯨船が主に用いる海路の探査・観測」のため、海軍の一隻またはそれ以上の艦船を派遣し、それに見合った士官を雇うという内容であった⁶⁾。

その際、シワードは議案とともに報告書を提出し⁷⁾、そのなかで、ベーリング海峡近海で操業する捕鯨船の遭難の頻発を指摘し、それらの事故が、同海域の海図がないことによって引き起こされていると主張した。彼は、捕鯨業を保護することは「アメリカにとって明らかに利益につながることであり、かつ義務でもある」と述べている。

同時に、シワードにとって北太平洋の海図を作成することは、東アジア諸国の貿易の発展にもつながることであった。彼は、同じ報告書のなかで、「まれにみる幸運のもと、アメリカによるカリフォルニア領有によって、中国および他の東洋諸国との貿易はあらたな勢いを得ている」と主張した。捕鯨船保護の問題と相まって、「商業的利益、海事競争、そして人道に関する全ての考慮が、政府に対し、これらの海域の探査と観測を求めている」として、海軍の艦船による北太平洋海域の測量実施を政府に要求したのである。

シワードによる議案が審議を経て、最終的に決議されたのは、1852 年 8 月 31 日のことである。この決議をうけ、アメリカ海軍では、同年 9 月 23 日、「アメリカの捕鯨船および貿易船が頻繁に行き交うベー

リング海域、北太平洋、中国近海について、軍事および通商の目的により測量・探査を実施する遠征の司令長官」として、カドワレイダー・リングールド (Cadwalader Ringgold) が任命された⁸⁾。

艦隊は、旗艦ヴィンセンス号をはじめ、艦隊のなかで唯一の蒸気艦であるジョン・ハンコック号、およびブリッグ船ポーポイズ号 (*Porpoise*)、スクーナー船フェニモア・クーパー号 (*Fenimore Cooper*)、補給船ジョン・ケネディー号 (*John P. Kennedy*) の計 5 隻から構成されることとなった。

実はリングールド自身、および測量艦隊を構成する艦船は、前述のチャールズ・ウィルクスによる太平洋探検隊と密接に関わっている。リングールドは、ウィルクス探検隊においてポーポイズ号の艦長として参加しており、ウィルクスからその功績を高く評価されていた人物である⁹⁾。リングールドが北太平洋測量艦隊の司令長官に任命されたのも、彼のウィルクス艦隊での経験が重視されてのことであろう。

また、北太平洋測量艦隊の旗艦ヴィンセンス号は、ウィルクス艦隊の旗艦でもあり、また、リングールドがウィルクス艦隊で指揮していたポーポイズ号も、測量艦隊に加わることとなった。さらに、リングールドは海軍長官に対し、ウィルクス艦隊で使用された子午線儀を北太平洋測量艦隊においても使用したいと求めている¹⁰⁾。リングールドは、ウィルクス艦隊を継承する一大事業として、この北太平洋測量艦隊の役割を捉えており、大きな成果があがることを期待していたのである。

約 8 か月の準備期間を経て、1853 年 6 月 11 日、艦隊はヴァージニア州ノーフォークを出港した。喜望峰経由のルートで、後述するように途中から 2 班に分かれ、それぞれ測量を実施しながら中国近海を目指し、1854 年 3 月から 5 月にかけて、艦隊は香港に集結した。

この香港で、測量艦隊の活動は中断を余儀なくされることとなる¹¹⁾。当時、太平天国の乱により清国国内が揺れており、それは、香港や広東に在住する外国人たちの商業活動や生活にも影響を与えていた。しかし、マシュー・C・ペリー率いる東インド艦隊が日本に集結していたため、アメリカ人たちを保護する艦船が中国近海に不足していたのである。そのため、広東在住のアメリカの商人たちはリングールドに保護を要請し、その要請に応じて、しばらくの間、測量艦隊が中国近海に留まることとなった。

しかし、その滞在中にリングールドは病に冒され、



図1 ジョン・ロジャーズ肖像
(アメリカ議会図書館所蔵)

断続的な高熱に襲われるようになった。療養中、彼は当面の艦隊の指揮をジョン・ハンコック号のジョン・ロジャーズ (図1) に委ねた。しかし最終的には、日本との条約締結を終え、香港に戻ってきたペリーの指揮の下、1854 年 8 月 1 日、リングールドからロジャーズへ測量艦隊の司令長官の職が移ることとなり、リングールドはアメリカ本国に送還されることとなった。

リングールドからロジャーズへの「交代劇」は、実際にはもっと複雑であり、リングールド自身、ペリーの指揮に対してかなり反発し、アメリカ帰国後にはこの司令長官交代の不当性を訴える活動を行うが、これらの詳細については、別の機会に論じることとする¹²⁾。ここでは、1854 年 8 月 1 日以降、測量艦隊の司令長官にジョン・ハンコック号艦長ジョン・ロジャーズが就任したこと、それに伴い、ロジャーズは旗艦ヴィンセンス号に移乗したこと、の 2 点を確認しておきたい。それは、アメリカ国立公文書館に所蔵される北太平洋測量艦隊の海図の基本的性格とも密接に関わっているのである。

Ⅲ. 測量艦隊の海図目録および解説

(1) 海図目録について

アメリカ北太平洋測量艦隊にかかわる海図類は、アメリカ国立公文書館のⅡ館（カレッジパーク）内にある図像資料室（Cartographic and Architectural Records Section）に収蔵されている。

測量艦隊の海図類は、ウィルクス探検隊による海図、ペリー艦隊による海図、および1858年から1859年にかけてジョン・M・ブルックがフェニモア・クーパー号によって太平洋の測量を実施した際の海図とともに¹³⁾、アメリカ海軍水路局の海図類をまとめた同館刊行の目録（図2）にその詳細が掲載されている¹⁴⁾。ただし、その目録は「ハワイ諸島」や「日本」などのように、地域別に海図をまとおり、艦隊ごとの分類とはなっていない。本稿で紹介する目録とは、アメリカ国立公文書館所蔵の海軍水路局関係の海図類から、北太平洋測量艦隊による海図を抽出したものである。

以下、目録の各項目について説明していきたい。なお、上記の国立公文書館刊行の目録と区別するため、以下、公文書館刊行のものは『文書館目録』と記し、単に目録という場合には、本稿で紹介する目録を指すこととする。

「目録番号」とは、『文書館目録』による通し番号のことである。先述のとおり、海図は作成した艦隊別ではなく、地域ごとにまとめられている。「地域」の項目についても、『文書館目録』の分類通りとした。

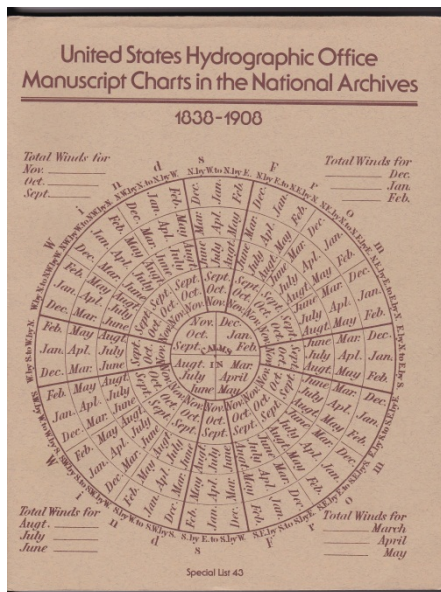


図2 『文書館目録』表紙

「目録番号」で抜けている番号は、他の艦隊によって作成された海図であることを意味している。「史料番号」の項目は、「目録番号」とは別にそれぞれの海図に付された番号である。同じ「目録番号」であっても、海図は1枚とは限らない。たとえば「琉球」の「目録番号」1625は、2枚の海図（451.36.#6,#7）から構成されている。そのため、公文書館で閲覧申請をする際は、「史料番号」で請求することが原則である¹⁵⁾。

「目録番号」ではなく、「史料番号」でその総数を数えると、海図ではないもの（クロノメーターの記録表〈目録番号93: 史料番号181.36.#79a。以下、93: 181.36.#79aのように記す〉など）も含め、実に100点におよんでいる¹⁶⁾。また、縦あるいは横の長さが約4メートルにも及ぶ海図もあり（1560: 451.36.#13）、こうした海図は、複数枚に分割されて収蔵されている（項目「分割枚数」を参照）。なお、「縦×横(cm)」に示した海図の大きさについて、複数枚に分割されている海図は、それらをつなぎ合わせた全体の大きさを示している。

海図の題名については、「原題」とあるように、『文書館目録』に掲載されている史料名ではなく、海図そのものに記された原題を採用した。原題がない場合には、『文書館目録』中の史料名を（）内に記している。また、その海図が対象とする地域の「日本語地名」も併記した。

「作成年月」についても、原則として海図に記載されている年月を採録した。ただし、年月が海図に記載されていないもので、筆者あるいは『文書館目録』により推定されているものについては、（）内にその年代を記した。また、推定が困難なもので、『文書館目録』に“ca.”(about)として年代が記されているものについては、同目録による表記通りの年代を<>内に記載した。

「測量船」に関しては、その対象地域の測量を実施した艦船の名前を記しており、基本的には海図に記載されている通りである。なお、測量艦隊がおそらく参考として持参していたと考えられる海図など、同艦隊による作成に該当しないものについては、「一」と同項目に表記した。

最後に、「縮尺」は『文書館目録』に記載されている“1 inch to approx.2 nautical miles”などの縮尺の表記を採用した。ただし、煩瑣となるため、原則として“approx.”(約～)の表記は省略している。なお、その他の「縮尺」の表記方法についても、『文

書館目録』の記載を採用している。

(2) 海図からみる測量艦隊

続いて、これらの海図から判明する測量艦隊の活動について解説したい。

まず先述のように、測量艦隊の海図としてアメリカ国立公文書館に収められている海図は、基本的にジョン・ロジャーズが、病により退職したリンゴールドを継いで同艦隊の司令長官に就任した 1854 年 8 月 1 日以降のものである。また、それ以前の海図として、ガスパル海峡のもの (1960: 451.36, #22) があるが、これは、ロジャーズが司令長官に就任する以前、ジョン・ハンコック号を指揮していた時の海図である。つまり、北太平洋測量艦隊の海図は、リンゴールドによる成果を除いた、ロジャーズによる測量活動の成果として保管されているのである。

一方、リンゴールドが司令長官をしていた期間の成果として、オーストラリア近海の測量があげられる。1854 年の春に香港に続々と測量艦隊の艦船が再集結したことは先述したが、それ以前、艦隊は大きく二つの班に分かれて測量活動を行っていた。一方は、ロジャーズ率いるハンコック号と、ジョン・ケネディー号、フェニモア・クーパー号の 3 隻による東南アジア海域の測量である¹⁷⁾。上記のガスパル海峡の海図は、この測量時の成果である。もう一方は、リンゴールド率いるヴィンセンス号およびポーポイズ号によるオーストラリア近海の測量である。リンゴールド自身、このオーストラリア近海の測量調査は、中国近海の測量と並び、アメリカ合衆国の新たな貿易活動に資するものとして重視していた¹⁸⁾。しかし、リンゴールドによるオーストラリア近海測量の成果は、測量艦隊の海図としては残されていない。

それでは、リンゴールドによる測量成果はどうなったのであろうか。この点については、今後の調査課題とせざるを得ないが、次のように推測することは可能であろう。先述のようにリンゴールドからロジャーズへの司令長官の交代は、穏便に実施されたわけではなく、リンゴールド自身の強い反発を伴うものであった。そのため、リンゴールドが作成した海図類が、ロジャーズには引き継がれなかった可能性を指摘できる。リンゴールドはアメリカ合衆国への帰国に向けて香港を出航する直前の 1854 年 9 月 3 日、海軍長官に対し、自身の活動にかんする報告書を帰国後に提出する、と述べている¹⁹⁾。この帰国に際し、リンゴールドは海図をロジャーズに引き継

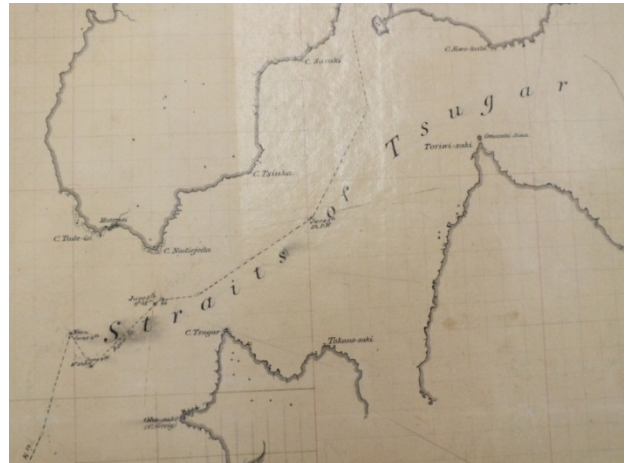


図3 津軽海峡(上)および能登半島(下)
(1578: 451.36, #23より)

ぐことなく、アメリカ合衆国に持ち帰ったのではなからうか。いずれにせよ、海図の所在も含めて、今後調査を進めていきたい。

次に、北太平洋測量艦隊の海図を概観すると、同艦隊による新規の成果も多い一方で、先行するイギリスやロシアによる測量成果に基づくものも少なくないことが分かる。たとえば、敦賀湾から津軽半島までの日本海岸側を測量(走測)したフェニモア・クーパー号による海図(1578: 451.36, #23、図3)は、世界周航を果たしたロシア海軍のクルーゼンシュテルンの艦隊による海図と²⁰⁾、イギリス海軍のリチャーズによる海図を利用している²¹⁾。なお、海図に記された“Notes”には、クルーゼンシュテルンやリチャーズによる測量結果と、クーパー号による測量結果の誤差について説明がなされている。さらに同海図は、シーボルトによって刊行された日本地図を利用している。シーボルトの地図とは、1828年(文政11年)に日本から国外追放されたシーボルトが、伊

能忠敬による地図を含めて日本滞在中に収集した資料をもとに刊行した『日本』の図録に掲載された地図のことを指す²²⁾。シーボルトによって欧米世界に公表された日本の地図は、ペリー艦隊によっても利用されており(今津 2007)、日本の地形を知る上で、最新の情報であったといえよう。

ペリー艦隊による測量成果も、北太平洋測量艦隊にとって重要な参考資料であり、同時に再調査の対象でもあった。測量艦隊司令長官の交代に際し、ロジャーズはペリーから下田や箱館、あるいは琉球の測量結果を知らされたと考えられる。“Verification of the Chart of Commodore Matthew C. Perry” (ペリー提督の海図の検証図) として、箱館および下田の海図が残されているのである (1555: 451.36, #33a / 1574: 451.36, #34a)。また、琉球本島と西方の慶良間諸島を描いた海図は、主にペリー艦隊の成果から作成しつつ、経度については測量艦隊により計測した旨が注釈に記されている (1625: 451.36, #7, 図 4)。ペリー艦隊の測量成果は、それ単独としてではなく、より専門性の高い北太平洋測量艦隊に継承されるかたちで、アメリカ海軍に蓄積されたのである。

目録には、測量艦隊による海図の原図だけではなく、1856年に測量艦隊がアメリカへ帰国し、任務を解かれた後に刊行されたものも含まれている。『文書館目録』の分類では測量艦隊の海図となっているが、たとえば最も年代が新しいものとして、1902年という海図がある (445: 553.46, #1)。海図自体は、1868

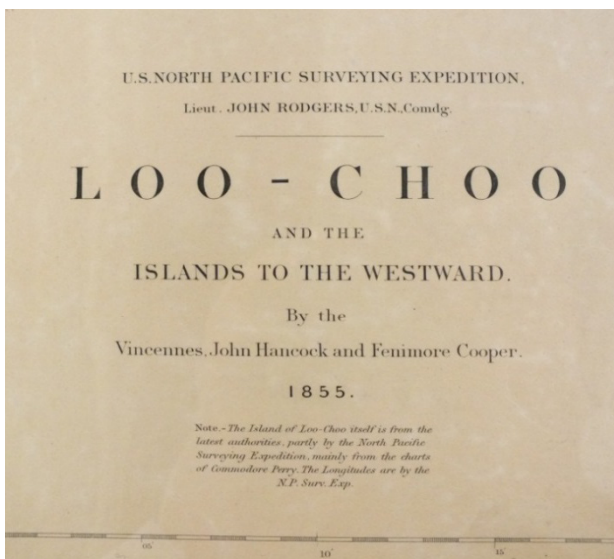


図 4 海図の原題
(1625: 451.36, #7 より)

年に刊行されたものを基礎に、1894年11月と1895年2月に「広範囲にわたる修正 (Extensive corrections)」を加えた海図、と注記がある。その1895年の修正版に、さらに修正情報を書き加えたものがこの海図であり、朱書で1902年の修正であることが記されている。北太平洋測量艦隊の成果は、20世紀に入ってなお、アメリカ海軍にとって重要な情報の基礎をなしていたといえよう。

刊行という点でいえば、測量艦隊の成果である海図の刊行は、大きく遅れることとなったようである。1858年4月12日付の上院への報告書において、アメリカ海軍省は、ロジャーズによる測量艦隊の成果の刊行をどのように行うのか、という議会からの質問に答えるかたちで、次のように刊行状況を伝えている。まず、すでに刊行がなされた海図として、①カムチャツカ半島アバチャ湾口 (目録に該当なし)、②セントローレンス湾 (1525: 181.36, #77 をもとに刊行か)、③ベーリング海峡 (2014: 191.33, #81 をもとに刊行か)、④太平洋の危険地を記したもの (95: 272.42, #51。95: 272.42, #50 はその原版と思われる)、⑤白河河口とその針路 (1657: 451.36, #27 をもとに刊行か、図 5) が挙げられている²³⁾。また、印刷中の海図として、ガスパル海峡やクロノメーターの記録表が挙げられ、印刷に向けた準備中のものとして、日本の戸田や下田、あるいはボルネオ島が紹介されている。

1858年段階ですでに刊行済みという①～⑤のなかで、実際に刊行された海図を確認することができたものは、④である。測量艦隊の海図類のなかにもその印刷物が収められているが (95: 272.42, #51)、まったく同じ地図をアメリカ議会図書館の地理・地図室でも発見することができた²⁴⁾。

そのほか、1868年に刊行された海図も目録中に確認することができる (2020: 191.33, #80 など)。しかし、1858年から1868年の間に刊行されたものについては確認できず、1858年の時点で印刷準備中であつた上記の海図類についても、発見することができなかった。

測量艦隊の成果が具体的にどのようなかたちで公表されたのか、という点については今後の調査課題であるが、それらの刊行が早急に、かつ積極的に進められたわけではないということが、1858年4月の海軍省報告書からもうかがうことができるであろう。その要因として、ロバート・ジョンソンは、測量艦隊の成果の刊行をめぐるリンゴールドとロジャ

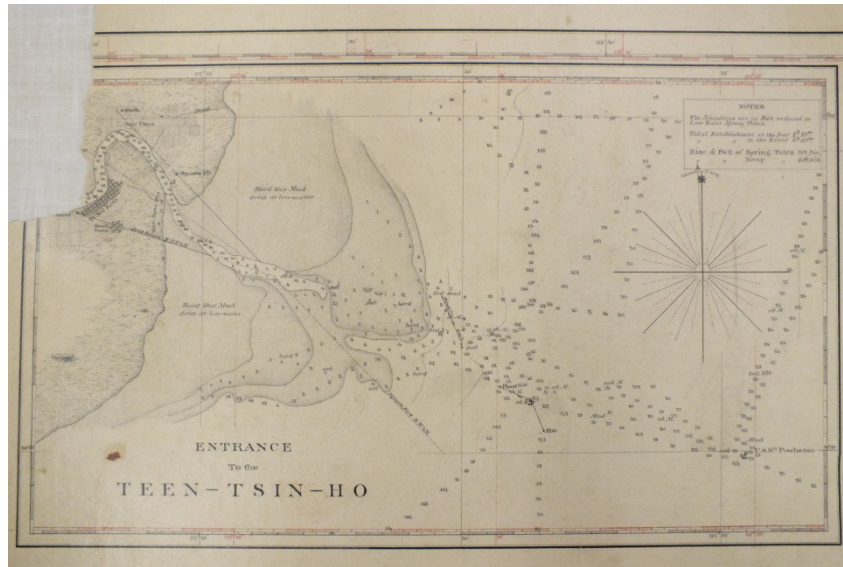


図5 白河河口の海図
(1657: 451.36, #28 より)

ーズの確執があったと指摘している。つまり、両者が互いにその成果が自身のものであることを海軍長官に訴え、そのため、刊行に向けた作業は「互いの反感によって阻害され続けることとなった」という (Johnson 1967: p. 142)。さらに、それらの刊行がなかなか進展しないなかで勃発した南北戦争により、測量艦隊の成果の全刊行は実現されなかったといわれている (ペリー 1998: 154 頁)。

これらの成果の未刊行という問題こそが、アメリカ北太平洋測量艦隊に從來大きな注目がなされなかったひとつの大きな要因ともいえるであろう。ジョン・ペリーが述べるように、ペリー艦隊の大部の公式遠征記録の刊行は、歴史研究の格好の素材を世に示した (ペリー 1998: 150 頁)。また、北太平洋測量艦隊の前提ともいえるチャールズ・ウィルクスの探検隊も航海記を刊行している。しかし、リンゴールド、およびその後任のロジャーズによる北太平洋測量艦隊は、両者の反目もあつてか、航海記も刊行されず、その成果である海図の公表もなかなか進まなかった。先述のようにアメリカ海軍内では北太平洋測量艦隊による成果がその後も長らく利用され続けるのであるが、世間一般においては、その存在は忘れ去られていったといえよう。

むすびにかえて

本稿を通じて、筆者がアメリカ国立公文書館で調査したアメリカ北太平洋測量艦隊の海図類を紹介し

た。しかし、残された課題は多い。リンゴールドによる成果はどのようなかたちで、そしてどこに保存されているのか。ペリー艦隊による海図と、北太平洋測量艦隊の海図は、どのような関係にあり、また、両者はどのようなかたちでアメリカの太平洋政策の展開に利用されたのか。これらの点の解明が必要であろう。また、『文書館目録』を詳細に見ると、同目録で北太平洋測量艦隊の海図として掲載されているもの以外でも、たとえばジョン・ブルックによる1858-1859年の測量に測量艦隊の成果が利用されていたということが判明する。今後は、ブルックによる海図も調査が必要となるであろう。アメリカ海軍による太平洋探査、あるいは政府レベルの太平洋政策という大きな観点から、引き続き研究・調査を続けていきたい。

最後に、筆者が専門とする日本史研究とアメリカ北太平洋測量艦隊の関係についても言及しておきたい。北太平洋測量艦隊の航海記録が刊行されなかったことは、日本史研究の文脈においても、同艦隊の存在が研究者のあいだで軽視・看過されるという結果につながったと考えられる。しかし、ペリー艦隊とともに、アメリカ北太平洋測量艦隊もまた、太平洋航路の開設と捕鯨船員の保護というアメリカ合衆国の太平洋政策と密接にかかわっていたのであり、両方の艦隊に注目してこそ、アメリカが日本開国の先鞭をつけたことの歴史的意義がより一層明らかとなるであろう。筆者の前稿 (後藤 2012) に加え、本

稿による海図の目録の紹介が、アメリカ北太平洋測量艦隊にかんする研究の進展につながることを期待したい。

注

- 1) 測量艦隊にかかわる研究史については、(後藤 2012) で簡単な整理を行った。
- 2) 大阪大学大学院文学研究科「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム [OVC プログラム]」(日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」)による。なお、筆者が実施した調査の報告書については、『多言語文化研究に向けた複合型派遣プログラム 派遣成果最終報告書(平成 21 年度～平成 24 年度)』(大阪大学大学院文学研究科、2013 年)、23-24 頁、135-137 頁を参照。
- 3) とくにことわりがない限り、以下の I 章から II 章にかけての記述は、欧米諸国と太平洋世界との関係についてその概略をまとめた後藤(2013)による。
- 4) 以下の記述については、タイユミット(1993)および横山(2001)を参考にした。
- 5) ウィルクス探検隊の航海記として、Charles Wilkes, *Narrative of the United States exploring expedition. During the years 1838, 1839, 1840, 1841, 1842*, Vol. 1-5 (Philadelphia, 1849) を参照。
- 6) 32nd Congress, 1st Session, Senate, Bills and Resolution, No. 143.
- 7) 32nd Congress, 1st Session, Senate Report, No. 43.
- 8) *Records Relating to the United States Surveying Expedition to the North Pacific Ocean, 1852-1863* (National Archives and Records Administration (NARA), R.G.45, N.A.M.88, Roll. 1). なお、以下の艦隊出航前後の経緯については、同史料、および同 Roll. 2 による。
- 9) *Narrative of the United States exploring expedition*, p. xvii.
- 10) Ringgold to J. C. Dobbin, the Secretary of the Navy, March 11th, 1853 (*Records Relating to the United States Surveying Expedition*, Roll. 2).
- 11) 以下、中国近海における測量艦隊の動向については、Johnson (1967: pp. 109-113) を参照。
- 12) この「交代劇」について刊行されている基本的史料として、リンゴールド側の視点に立ったものではあるが、Memorial of Commander Cadwalader Ringgold, United States Navy, to the Congress of

the United States, praying to be reinstated on the active list of the service, together with correspondence between the secretary of the Navy (Washington D. C., 1856) がある。

- 13) ブルックは北太平洋測量艦隊に参加しており、同艦隊で測量することのできなかつたハワイ経由の太平洋航路を測量するため 1858 年に派遣された。しかし、翌年の夏に神奈川沖で難破する。安政 5 年(1858)に締結された日米修好通商条約の批准のため、万延元年(1860)にアメリカ合衆国に派遣された徳川幕府の遣米使節団を助けた人物こそ、このブルックである。ブルックは咸臨丸の水先案内人として同艦に乗り、アメリカへの帰国を果たしたのであった (Johnson 1979)。
- 14) *United States Hydrographic Office Manuscript Charts in the National Archives* (Washington D. C.: National Archives and Records Service, 1978).
- 15) なお、目録番号 150: 史料番号 272.42, #63 の絵図(風景画)については、所在が不明である。アメリカ国立公文書館では、複数の海図がフォルダにはさまれて収蔵されている。何らかのミスで、他のフォルダに紛れ込んでいる可能性もあるが、いずれにせよ、文書館スタッフの尽力にもかかわらず、調査最終日まで同史料を発見することはできなかった。
- 16) 測量艦隊の海図がアメリカ国立公文書館に収蔵されていることについては、すでに横山伊徳により、「米国国立公文書館にロジャーズ艦隊による海図原図が、ペリー艦隊測量図を訂正したものも含めて 20 点程残っている」と紹介がされている(横山 2001: 295-296 頁)。この「20 点程」というのは、おそらく「地域」が日本となっているものを指しているであろう。
- 17) この時のロジャーズの測量活動については、Johnson (1967: pp. 106-109) を参照。
- 18) Ringgold to Dobbin, December 25th, 1853 (*Records Relating to the United States Surveying Expedition*, Roll. 2).
- 19) *Memorial of Commander Cadwalader Ringgold*, p. 38.
- 20) なお、クルーゼンシュテルン艦隊に同行し、1804 年に長崎に来航したのが、遣日使節ニコライ・レザノフである。
- 21) リチャーズについては、イギリス海軍大佐ジョージ・ヘンリー・リチャーズ (George Henry Richards) のことと思われるが、詳細は未調査である。

- 22) 『日本』図録1巻(中井晶夫・八城園衛訳、雄松堂書店、1978年)。
- 23) 白河河口の測量について付言しておきたい。北京へと進むうえでも重要な意味を持っていた白河(現海河)の測量は、本来の測量艦隊の調査対象ではなかったようである。しかし、アメリカ外交使節を北京まで送る際の針路を測量するという、リンゴールドと、本国から中国に派遣された外交官ロバート・M・マクレーンとの約束にしたがって、リンゴールドが司令長官を辞した後の1854年10月、ジョン・ハンコック号とフェニモア・クーパー号によって測量が実施されることとなった(Johnson 1967: pp. 117)。
- 24) Register-Charts of Reported Dangers of the Pacific Ocean, Catalog No. 910a 1857u, Geography and Map Reading Room, Library of Congress.

参考文献

- 今津浩一(2007)『ペリー提督の機密報告書—コンフィデンシャル・レポートと開国交渉の真実』ハイデンス。
- エティエンヌ・タイユミット(1993)〈増田義郎監修〉『太平洋探検史』創元社。
- 木村和男(2007)『北太平洋の「発見」』山川出版社。
- 後藤敦史(2012)「幕末期通商政策への転換とその前提—アメリカ北太平洋測量艦隊の来航と徳川幕府」『歴史学研究』894号、1-17頁。
- 後藤敦史(2013)「18~19世紀の北太平洋と日本開国」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、185-213頁。
- ジョン・C・ペリー(1998)〈北太平洋国際関係史研究

会訳)『西へ!アメリカ人の太平洋開拓史』PHP研究所。

- 平川新(2008)『日本の歴史12 開国への道』小学館。
- 山岸義夫(1995)『アメリカ膨張主義の展開』勁草書房。
- 横山伊徳(2001)「19世紀日本近海測量について」黒田日出男・M. E. ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会。
- Johnson, Robert E. (1967), *Rear Admiral John Rodgers*, Annapolis: Naval Institute Press.
- Johnson, Robert E. (1979), *Far China Station*, Annapolis: Naval Institute Press.
- Tower, Walter S. (1907), *A History of the American Whale Fishery*, Philadelphia: John C. Winston.

付記

アメリカ議会図書館およびアメリカ国立公文書館においては、多くの方々のサポートによって調査を行うことができた。すべての方々の名前をあげることはできないが、アメリカ議会図書館の藤代真苗氏、菅井則子氏、キヨヨ・パイファー氏には、初期の調査段階から非常にお世話になった。また、海図の調査にかんしては、議会図書館地理・地図部門の Stephen Paczolt 氏の全面的な協力を得ることができた。記して深甚の謝意を表したい。

なお、注2に記したとおり、本稿は大阪大学大学院文学研究科「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム [OVCプログラム]」(日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」)による海外調査の成果の一部である。

アメリカ北太平洋測量艦隊による海図の目録

目録番号	史料番号	地域	原題	対象地名	作成年月	測量船	縮尺	縦×横(cm)	分割枚数	備考
92	142.21, #V-1, sheet1	太平洋	Track-Chart of the U. S. Pacific Surveying Expedition, 1854-1856	北太平洋測量艦隊航路	(1859年)	-	-	66.2 × 87.6		1859年のブルックの測量航路が追記されている
	142.21, #V-1, sheet2	太平洋	Track Chart of the U. S. Pacific Surveying Expedition	北太平洋測量艦隊航路	(1855年)	-	-	68.5 × 87.2		
	142.21, #V-1, sheet3	太平洋	Track-Chart of the U. S. Pacific Surveying Expedition, 1854-1856	北太平洋測量艦隊航路	(1855年)	-	-	67.5 × 87.5		
	142.21, #V-1, sheet4	太平洋	Track-Chart of the U. S. Pacific Surveying Expedition, 1854-1856	北太平洋測量艦隊航路	(1855年)	-	-	64.1 × 85.2		
93	181.36, #79a	太平洋	Rates of Chronometers of the U. S. Ship Vincennes	(クロノメーター表)	(1854-55年)	-	-	38.5 × 59.0		1854年8月22日から1855年10月22日の記録
95	272.42, #50	太平洋	Register-chart Reprinted Dangers in the Pacific Ocean	太平洋	1857年6月	-	-	65.6 × 84.4		一般的な海図に掲載されていない危険地を掲載
	272.42, #51	太平洋	Register-chart Reprinted Dangers in the Pacific Ocean	太平洋	1857年6月	-	-	65.6 × 84.5		上記#50の印刷版
144	272.42, #57	小笠原諸島	Port Lloyd on the West Side of Peel Island	父島二見港	1854年	ヴァインセンス	4インチ=1海里	48.1 × 63.1		左部分に小笠原諸島全体の地図、1854年のプリマス号の海図から作成した母島の地図、及び1827年のイギリス海軍ピーチエリーの海図から作成した父島巽湾地図を掲載
	272.42, #58	小笠原諸島	Port Lloyd on the West Side of Peel Island	父島二見港	1854年	ヴァインセンス	4インチ=1海里	46.0 × 63.2		上記#57の原因
145	272.42, #56	小笠原諸島	Bonin (or Arzobispo) Group	小笠原諸島	(1854年)	-	1インチ=2海里	126.2 × 70.9		
147	272.42, #60	小笠原諸島	Port Lloyd in Peel Island of the Bonin Group	父島二見港	1854年11月	ヴァインセンス	8インチ=1海里	70.8 × 97.6		
149	272.42, #64	小笠原諸島	View of the Bonin Islands from South Head	小笠原諸島風景画	1854年10月30日	-	-	49.2 × 68.7		
150	272.42, #63	小笠原諸島	(Bonin Islands)	-	-	-	-	-		原史料所在不明
	272.42, #65	小笠原諸島	Sketch of the Bonin Islands from the West PAP	小笠原諸島風景画	1854年10月24日	-	-	47.7 × 68.1		
151	272.42, #62	小笠原諸島	Sketch of the Bonin Isl[破壊]	小笠原諸島風景画	1854年	-	-	54.1 × 68.9		
152	272.42, #53	小笠原諸島	Reconnaissance of Rosario or Disappointment Island	西之島	1854年10月	ヴァインセンス	1インチ=0.5海里	41.2 × 59.8		上陸は実行不可能の注記あり
153	272.42, #54	小笠原諸島	Views of Lot's Wife, Borodino Islands (Ohigashi Jima), Rosario or Disappointment Islands	夫婦岩・大東諸島・西之島	1854年10-11月	ヴァインセンス	(島により)異なる	34.5 × 50.0		
154	272.42, #55	小笠原諸島	Views of Lot's Wife	夫婦岩	1854年11月	ヴァインセンス	1インチ=1海里	42.4 × 57.4		
235	272.42, #66	ハワイ諸島	Harbor of Hilo or Waiakea, Island of Hawaii	ヒロ港	1856年	ヴァインセンス	1/20000	42.0 × 56.7		
432	283.22, #3	アラスカ南西	(Aleutian Islands and Alaska Peninsula)	アリユーンヤン列島及びアラスカ半島	<ca. 1850>	-	1インチ=25海里	62.7 × 92.1		測量艦隊が持参した参考図か
436	181.36, #76	アラスカ南西	Harbor of Tschitschagoff, Island of Attou	アリユーンヤン列島アトウ島	1855年7月	F・クーパー	1インチ=20海里	72.6 × 127.5		
437	181.36, #72	アラスカ南西	(Biljnie Group or Near Islands, Aleutian Islands)	アリユーンヤン列島アトウ島周辺	1855年7月	F・クーパー	1インチ=3海里	73.0 × 128.4		
441	181.36, #75	アラスカ南西	(Western Part of Andreanof Group, Aleutian Islands)	アンドレアノフ群島西方	1855年8月	F・クーパー	1インチ=3海里	72.4 × 153.4		左上部に紙を継いでセミソボンユノイ島を描く
443	181.36, #74	アラスカ南西	(Eastern Part of Andreanof Group, Aleutian Islands)	アンドレアノフ群島東方	1855年8月	F・クーパー	1インチ=3海里	67.9 × 169.9	2枚	
444	181.36, #73	アラスカ南西	Aleutian Archipelago Sheet No.2	アンドレアノフ群島及びフォックス諸島	1855年7・8月	F・クーパー	1インチ=10海里	59.9 × 104.4		
445	553.46, #1	アラスカ南西	Aleutian Archipelago Sheet No.2	アンドレアノフ群島及びフォックス諸島	(1902年)	F・クーパー	1インチ=10海里	62.1 × 106.4		1868年に刊行された海図に、1893年・1895年の訂正を加えた海図。左上端に1902年の書付あり

目録番号	史料番号	地域	原題	対象地名	作成年月	測量船	縮尺	縦×横(cm)	分割枚数	備考
446	181.36, #70	アラスカ南西	Bays in SW. Peninsula of Adack ID, Aleutian Archipelago	アリユーンシヤン列島アダック島ウォーターフォール湾	1855年8月	F・クーパー	3インチ=1海里	106.3×65.7		1927年10月29日付の鉛筆による書込みあり
447	2121.19, #3	アラスカ南西	H. O. Chart No.8 (plan) S. W. Part of Adack Island, Bay of Waterfalls	アリユーンシヤン列島アダック島	1901年	F・クーパー	2.5インチ=1海里	65.3×58.9		1855年8月のCooper号の測量成果にその後の測量の成果を追記した海図
450	181.36, #71	アラスカ南西	(Islands of the Four Mountains, and Part of the Fox Islands Group, Aleutian Islands)	フォックス諸島(ウリアガ島など)	(1855年)	F・クーパー	1インチ=3海里	72.5×188.4	2枚	1849年のロシアの海図を参照とあ
1524	181.36, #67	シベリア東海岸	The Asiatic Coast of Behring Straits	ベーリング海峡シベリア側海岸	1855年7-8月	ヴァインセンス	1インチ=5海里	125.2×133.7	2枚	
1525	181.36, #77	シベリア東海岸	St. Lawrence Bay, Showing Lutke's Harbor	セントローレンス湾	1855年9月	ヴァインセンス	1インチ=1海里	69.1×124.3		
1526	181.36, #78	シベリア東海岸	St. Lawrence Bay, Showing Lutke's Harbor	セントローレンス湾	1855年9月	ヴァインセンス	1インチ=3海里	39.8×48.4		1525を縮小した海図
1527	181.36, #68	シベリア東海岸	The Straits of Seniavie, Behring's Straits	ベーリング海峡セニアビア海峡	1855年8-9月	ヴァインセンス	1インチ=1海里	112.6×134.0	2枚	
1528	181.36, #69	シベリア東海岸	The Straits of Seniavie, Behring's Straits	ベーリング海峡セニアビア海峡	1855年9月	ヴァインセンス	1インチ=2.5海里	66.3×80.4		1527の印刷版
1530	181.36, #79	シベリア東海岸	Part of the East Coast of Siberia	シベリア東海岸	1855年7月	ヴァインセンス	1インチ=6海里	72.3×61.1		
1533	451.36, #38	シベリア東海岸	Ochotsk Sea Sheet No.1	カムチャツカ半島西海岸	1855年8-9月	J・ハンコック	1インチ=5海里	156.7×90.1		赤い海岸線および赤字の地名はロシアの1851年の海図による
1535	451.36, #25	シベリア東海岸	Harbor of Ayan, Sea of Ochotsk	アヤン港	1855年9月	J・ハンコック	8インチ=1海里	102.2×78.4		赤い海岸線および赤字の地名はロシアの1852年の海図による
1536	451.36, #26	シベリア東海岸	Harbor of Ayan, Sea of Ochotsk	アヤン港	1855年9月	J・ハンコック	8インチ=1海里	80.9×113.2		赤い海岸線および赤字の地名はロシアの1852年の海図による
1536	463.3, #8	シベリア東海岸	(Sakhalin Island and Mouth of the Amur River, Siberia)	サハリン島及びアムール河口	不明	-	1インチ=20海里	67.1×33.1		測量艦隊が持参した参考図か
1537	283.22, #11	シベリア東海岸	De Kastories Bay near the Mouth of Amur	デカストリ湾	1854年	-	3インチ=1海里	47.1×52.5		ロシアの海図からのトレーシング。測量艦隊が持参した参考図か
1538	283.22, #13	シベリア東海岸	Chart of the Kuril Islands, New Archangelsk	クリル諸島北方	1849年	-	1インチ=12海里	44.3×58.1		Capt. Hedgesの海図からのコピーである。測量艦隊が持参した参考図か
1540	463.3, #2	日本	(Japan (Except Hokkaido))	日本(北海道除く)	<ca. 1850>	-	1インチ=25海里	73.4×68.8		測量艦隊が持参した参考図か
1545	463.3, #6	日本	(Hokkaido and Southern Kurile Islands)	北海道及びクリル諸島南方	<ca. 1850>	-	1インチ=20海里(緯度)、1インチ=35海里(経度)	47.8×65.8		同上
1546	451.36, #35a	日本	(West Coast of Hokkaido)	北海道西岸	(1855年7月)	J・ハンコック	1インチ=3海里	342.2×141.7	6枚	
1547	451.36, #35b	日本	West Coast of Yezo, Japan	北海道西岸	1855年7月	J・ハンコック	1インチ=3海里	240.5×140.1	3枚	
1548	451.36, #37	日本	Straits of Tssoogar or Sangar, North of Japan	津軽海峡	1855年7月	J・ハンコック	1インチ=1海里	139.1×86.0	2枚	
1549	451.36, #24	日本	Straits of Tssoogar or Sangar in the North Part of Japan	津軽海峡	1855年6-7月	J・ハンコック	1インチ=3海里	160.5×208.7	4枚	
1550	451.36, #36	日本	Straits of Tsugar, Japan	津軽海峡	1855年	J・ハンコック	1インチ=3海里	65.2×87.4		1548, 1549の版画板。イタリアック体の数字はイギリスの海図による。
1555	451.36, #36a	日本	Straits of Tsugar, Japan	津軽海峡	1855	J・ハンコック	1インチ=3海里	68.0×91.6		同上
1555	451.36, #33a	日本	Harbor of Hakodadi in the Island of Jesso	箱館	1855年6月	-	3インチ=1海里	88.7×60.9		ペリー艦隊による海図の検証図
1556	451.36, #33b	日本	the Harbor of Hakodadi in the Island of Jesso	箱館	1855年6月	-	3インチ=1海里	70.3×93.6		
1560	451.36, #13	日本	Reconnaissance[sic] of East Coast of Nippon, Empire Japan, from Simoda to Hakodadi	下田～津軽海峡の本州東岸	1855年5月29日-6月17日	ヴァインセンス号のボート	1インチ=3.5海里	392.4×155.6	5枚	
1574	451.36, #34a	日本	Harbor of Simoda, Island of Nippon	下田	1855年5月	-	6インチ=1海里	121.2×71.7		ペリー艦隊による海図の検証図

目録番号	史料番号	地域	原題	対象地名	作成年月	測量船	縮尺	縦×横(cm)	分割枚数	備考
1575	451.36. #16	日本	Harbor of Heda in the Principality of Idsu	戸田	1855年	J・ハンコック	16インチ=1海里	67.6 × 89.7		測深・海岸線はロシアの海図から作成
1576	451.36. #17	日本	Harbor of Heda, Island of Nippon	戸田	1855年	J・ハンコック	5.5インチ=1海里	45.3 × 49.9		1575の縮尺版。ロシア艦隊ディアナ号の測量成果を主に利用
1578	451.36. #23	日本	West coast of Nippon	敦賀湾～津軽海峡の本州北西海岸	1855年5-6月	F・クーパー	1インチ=6海里	172.7 × 143.2	2枚	1805年のクルーゼンシュテルンによる海図、1855年のイギリス海軍リチャーズによる海図、および1840年刊行のシーボルトの日本地図を参考
1595	463.3. #3	日本	Straits of Van Der Cappellen	下関海峡	<ca. 1850>	-	1インチ=1海里	38.5 × 59.0		測量艦隊が持参した参考図か
1598	463.3. #4	日本	(Southern Kyushu and Adjacent Islands)	南九州とその近隣諸島	<ca. 1850>	-	1インチ=12海里	65.0 × 49.2		"Chart composed from various informed citizens & observations by - Phillip Frederic Vo St" と手書きあり。測量艦隊が持参した参考図か
1601	463.3. #7	日本	(Southern Kyushu and Adjacent Islands)	南九州とその近隣諸島	<ca. 1850>	-	1インチ=12海里	67.8 × 49.8		測量艦隊が持参した参考図か
1601	451.36. #14	日本	Kago-Sima Bay, South Coast of Kiusiu	鹿児島湾	1855年1月	ヴァインセンス	1インチ=1海里	124.9 × 68.6		
1602	463.3. #5	日本	(Nagasaki Harbor and Approaches, West Coast of Kyushu)	長崎と九州西岸の通路	<ca. 1850>	-	1インチ=1海里	48.9 × 65.4		測量艦隊が持参した参考図か
1605	451.36. #18	日本	Reconnaissance[sic] of Gotto Islands and Straits with the S. W. Coast Kiusiu	五島列島	1855年5月	F・クーパー	1インチ=1海里	234.1 × 171.4	4枚	
1606	451.36. #47	日本	Ass' Ears and Vincennes Rock, Japan Sea	男女群島	1854年12月	ヴァインセンス	1インチ=2海里	69.1 × 72.8		
1608	451.36. #49	琉球諸島	(Ryukyu Islands)	琉球諸島	<ca. 1850>	-	1インチ=15海里	66.6 × 99.5		測量艦隊が持参した参考図か
1609	463.3. #1	琉球諸島	(Northern Ryukyu Islands and Southern Tip of Kyushu, Japan)	琉球諸島北部～九州南端	<ca. 1850>	-	不明	66.4 × 47.7		同上
1611	451.36. #11	琉球諸島	South Extreme of Japan and the Islands towards Loo-Choo	南九州及び琉球方面の諸島	1854年12月-1855年1月	ヴァインセンス	1インチ=1.25海里	140.8 × 127.9	2枚	
1612	451.36. #10	琉球諸島	Island Chain between Loo-Choo and Kiusiu	鹿児島湾および琉球諸島	1855年1・4・5月	ヴァインセンス、J・ハンコック、F・クーパー	1インチ=2海里	231.1 × 172.5	6枚	
1613	451.36. #9	琉球諸島	Island Chain between Loo-Choo and Kiusiu	奄美大島・徳之島・沖永良部島・与論島	1855年1・4・5月	ヴァインセンス、J・ハンコック、F・クーパー	1インチ=2海里	240.2 × 174.0	4枚	
1614	451.36. #2	琉球諸島	Ou-Sima Group between Loo-Choo and Japan	奄美大島及び喜界島	1855年1・5月	ヴァインセンス、J・ハンコック、F・クーパー	1インチ=2海里	64.6 × 83.2		
1615	451.36. #15	琉球諸島	Fookaw Bay	奄美大島	1855年5月	ヴァインセンス、J・ハンコック	2インチ=1海里	65.8 × 98.7		
1616	451.36. #5	琉球諸島	Porpise Straits and South Part of Oushima Group	大島海峡及び奄美大島南方	1855年1月・5月	ヴァインセンス、J・ハンコック、F・クーパー	3インチ=1海里	133.3 × 173.9	2枚	
1617	451.36. #3	琉球諸島	Ou-Sima and Kakiroma	奄美大島及び徳之島	1855年1月	ヴァインセンス	1インチ=2.5海里	67.1 × 95.5		
1618	451.36. #46	琉球諸島	(Montgomery Group, North of Okinawa, Ryukyu Islands)	伊平屋島・野甫島・具志川島・伊是名島	(1855年)10月	-	1.5インチ=1海里	56.9 × 49.1		鉛筆書きで"montogo---Oct"とある
1624	451.36. #6	琉球諸島	West Coast of Loo-Choo and Neighboring Islands	琉球と西方の近隣諸島	1854-55年	ヴァインセンス、J・ハンコック、F・クーパー	1インチ=2海里	127.0 × 204.0	3枚	右上(北東)に64.5 × 48.0の地図を継ぎ足して、琉球本島全体を描く

目録番号	史料番号	地域	原題	対象地名	作成年月	測量船	縮尺	縦×横(cm)	分割枚数	備考
1625	451.36. #7	琉球諸島	Loo-Choo and the Islands to the Westward	琉球本島と慶良間諸島	1855年	ヴァインセンス、 J・ハンコック、 F・クーパー	1インチ=2.5海里	63.7 × 105.0		主にペリー艦隊による海図から作成し、部分的に測量艦隊の測量による
1625	451.36. #8	琉球諸島	Loo-Choo and the Islands to the Westward	琉球本島と慶良間諸島	1855年	ヴァインセンス、 J・ハンコック、 F・クーパー	1インチ=2.5海里	65.8 × 108.0		上記#7の原図
1626	451.36. #4	琉球諸島	Amakirima Group with Part of Loo-Choo	慶良間諸島	1855年	ヴァインセンス、 J・ハンコック、 F・クーパー	1インチ=1海里	63.9 × 100.7		
1627	463.3. #10	琉球諸島	(Okinawa and the Southern Ryukyu Islands)	琉球と南方の近隣諸島	<ca. 1850>	-	1インチ=10海里	65.4 × 47.0		測量艦隊が持参した参考図か
1628	272.42. #52	琉球諸島	Reconnaissance of Borodio Islands	南・北大東島	1854年10月	ヴァインセンス	1インチ=2海里	39.6 × 61.1		
1630	463.3. #9	朝鮮	(Korea)	朝鮮	<ca. 1850>	-	1インチ=23海里	59.5 × 48.8		測量艦隊が持参した参考図か
1650	463.3. #11	中国	(Southeast Coast of China and Formosa)	中国南方海岸及び台湾	<ca. 1850>	-	1インチ=17海里	79.8 × 69.6		同上
1651	283.22. #2	中国	Index to the Charts of the Coast of China	中国海岸	<ca. 1855>	-	1インチ=70海里	66.7 × 49.9		イギリス測量局による1849年刊行の海図。測量艦隊が持参した参考図か
1656	451.36. #29	中国	Reconnaissance of the Mouth of the Teen-Tsin-Ho or Pei-Ho	天津(白河)河口	1854年10月	J・ハンコック、 F・クーパー	2インチ=1海里	63.1 × 76.7		
1657	451.36. #27	中国	Mouth of Teen-Tsin-Ho or Pei-Ho and Approach to the Sha-Lui-Tien Banks	天津川河口及びその通路	1854年10月	J・ハンコック、 F・クーパー	1インチ=2海里	61.8 × 84.0		
1657	451.36. #28	中国	Mouth of Teen-Tsin-Ho or Pei-Ho and Approach to the Sha-Lui-Tien Banks	天津川河口及びその通路	1854年10月	J・ハンコック、 F・クーパー	1インチ=2海里	61.8 × 84.0		上記#27の原図
1960	451.36. #21	東南アジアと東インド	Gaspar Straits	ガスパル海峡	1857年	J・ハンコック、 J・ケネディー、 F・クーパー	1インチ=1.5海里	184.3 × 167.1	4枚	
1960	451.36. #22	東南アジアと東インド	Gaspar Straits	ガスパル海峡	1854年1~4月	J・ハンコック、 J・ケネディー、 F・クーパー	1インチ=1.5海里	178.1 × 171.5	4枚	上記#21のものになったと推定される手描きの地図
1961	451.36. #21a	東南アジアと東インド	Gaspar Straits	ガスパル海峡	(1857年)	J・ハンコック、 J・ケネディー、 F・クーパー	1インチ=3海里	93.9 × 87.0		上記#21の縮尺・印刷版
2014	191.33. #81	北極海	Behring's Sea and Arctic Ocean	ベーリング海・海峡及び北極海の一部	1855年	(J・ハンコック)	1インチ=40海里	90.5 × 93.4		#82で赤字で記されていた箇所が反映されている
2015	191.33. #82	北極海	Behring's Sea and Arctic Ocean	ベーリング海・海峡及び北極海の一部	1855年	(J・ハンコック)	1インチ=40海里	89.1 × 101.5		赤字で随所に書き加え
2015	191.33. #84	北極海	Part of the Arctic Ocean	北極海の一部	1855年8月	ヴァインセンス	1インチ=17海里	96.5 × 73.3		
2016	191.33. #85	北極海	Herald Island	ヘラルド島	1855	ヴァインセンス	1インチ=1海里	88.5 × 69.2		
2017	283.22. #1	北極海	(Bering Sea, Bering Strait, and Part of Arctic Ocean)	ベーリング海・海峡及び北極海の一部	<ca. 1855>	-	不明	31.6 × 39.0		測量艦隊が持参した参考図か
2018	283.22. #10	北極海	(Bering Sea, Bering Strait, and Part of Arctic Ocean)	ベーリング海・海峡及び北極海の一部	<ca. 1855>	-	3.6インチ=経度5°	61.7 × 88.4		ロシアの海図からのトレーシングか。測量艦隊が持参した参考図か
2018	191.33. #80	北極海	Behring's Sea and Arctic Ocean	ベーリング海・海峡及び北極海の一部	1868年	(J・ハンコック)	1インチ=40海里	91.5 × 90.3		ロシアの海図を利用
2020	191.33. #83	北極海	Behring's Sea and Arctic Ocean	ベーリング海・海峡及び北極海の一部	1868年	(J・ハンコック)	1インチ=40海里	88.6 × 92.9		#80と構成はほぼ同一。ただしアラスカとシベリアの間に赤線で国境線が引かれている
2021	191.33. #84a	北極海	Part of the Arctic Ocean	北極海の一部	<ca. 1868>	ヴァインセンス	1インチ=17海里	105.5 × 91.5		破損あり
2021	191.33. #86	北極海	Part of the Arctic Ocean	北極海の一部	<ca. 1868>	ヴァインセンス	1インチ=17海里	131.4 × 86.9		
2021	191.33. #87	北極海	Part of the Arctic Ocean	北極海の一部	<ca. 1868>	ヴァインセンス	1インチ=17海里	131.4 × 86.9		

備考：目録の凡例については、本論Ⅲ章(1)を参照のこと。

アメリカ軍作製の沖縄地形図 —解説と L893 図 (1:4, 800) の目録—

解説：小林 茂 (大阪大学名誉教授・大阪観光大学)
目録：小林 基 (大阪大学文学部学生)

近代の琉球列島の景観変化を検討するに際し、地形図をはじめとする各種の地図の分析が必要なことは改めていうまでもない。また空中写真が利用されるようになって以後については、その検討も要請される。この場合、とくに留意されるのは、第二次世界大戦中に地上戦がおこなわれた沖縄では、戦中・戦後期にアメリカ軍が作製・撮影した地図・空中写真の役割が大きく、その検討がまず必要という点であろう。戦中期の航空偵察にもとづく空中写真や地図にくわえて、戦後にも軍政や基地造成に関連した空中写真の撮影や地図作製がおこなわれている。とくに地図の作製や配布を担当したアメリカ陸軍地図局 (Army Map Service: AMS) の作業の全体像については、なお不明な点が多く、多面的な検討が要請されている (鍛塚 2007)。

もちろん、琉球列島の地形図に関連しては、これまでたびたびそれを検討する論考が公表されてきた (籠瀬 1972、島袋 1988、清水 2000)。これらではアメリカ軍作製の地図に関する言及はあるが、なお概観に留まっており、近年島袋 (2006) のおこなったような作業を、さらに深化させる必要がある。とくに陸地測量部の作製した戦前期の地図について、時期を追いながら目録と一覧図を示した清水 (1999) のような仕事がまず必要ということになる。

なお、琉球列島については、地形図は早くから秘図に指定され、戦前期には研究においてもほとんど使うことはできなかった (小林 1999)。この状態は戦中・戦後のアメリカ軍製の地図についてもあまり変わらなかったようであり (島袋 1999)、それを反映してこの種の地図の古書としての入手も容易でない。その点では、すでに沖縄県公文書館や琉球大学法文学部地理学教室がおこなっているようなアメリカ軍作製の地図画像のインターネットによる公開もさらに推進すべきであろう。

以下では、琉球列島に関するアメリカ軍作製図を概観するところから始め、それぞれの図群の特色を検討し、今後の課題を考えたい。

1. 琉球列島に関する AMS 作製図

表 1 は 2013 年 3 月にワシントン郊外のメリーランド州カレッジパークにあるアメリカ公文書館 II (NARA II) の 3 階の Cartographic and Architectural Room 備え付けの目録、Record Group 77、"AMS by Country" にみられる "JAPAN-RYUKYUS" の部分を写真撮影し、記載内容を整理して表にまとめたものである。これは琉球列島に関する地図群の一覧表に過ぎないが、この地域について作製された地図にはどのようなものがあるか、概観することができる。

まず戦中期のものからみると、3. L096 Ryukyu Retto Photomaps (1: 10,000) がある。この図群は、沖縄戦についてアメリカ側の記録を掲載する『沖縄県史、資料編 12』(2001) の 77~78 頁にみえる、関係部隊に対する配布地図のリストの (1)(b) に記載されているものに対応すると考えられる。この説明 (ただし和訳文) にはつぎのように書かれている。

(b) 縮尺 1 万分の 1 の写真地図。これは縮尺 1 万分の 1 地図と関連して配布される。撮影範囲は縮尺 1 万分の 1 地図よりわずかに広いだけである。攻撃目標指定方眼が記載される。

読谷村役場総務部企画課編 (1995) の末尾に複製が添付されている図 (図のナンバーは 3626-IIIp) はこの図群に属すると考えられる。表にカラー印刷の地形図、裏にモノクロの空中写真のモザイク図を印刷している。図の右下には、後述の図群番号 L891 (2 万 5 千分の 1 図) を編集して 1945 年 1 月に作製したと記されており、アメリカ軍海兵隊の沖縄戦史第 2 章「ICEBERG 作戦の準備」の情報の節にも、基本計画図としていた 2 万 5 千分の 1 図から作製されたものとする (Nichols and Shaw 1955: 20)。したがってこの図は 2 万 5 千分の 1 図を拡大したものであり、図が粗い印象を与えるのはそのためと考えられる。

つづく 5. L691 Ryukyu Retto (PAO-1945) (1: 100,000) に対応すると思われるのが、『沖縄県史、資料編 12』(2001) の上記リストの (1)(d) で、つぎのような説明がある。

表 1 : アメリカ軍が作製した琉球列島関係図

番号	ID 記号	名 称	縮尺	時期	備 考
1	L893	Okinawa Special (322 sheets)	1:1,200	1949-51	
2	L893	Okinawa Special (322 sheets)	1:10,000	1949-51	琉大地理学教室の試験的公開画像
3	L096	Ryukyu Retto Photomaps	1:10,000	1944-45	読谷村役場総務部企画課編 (1995 末尾)、『沖縄県史、資料編 12』(2001) の口絵 I および 77-78 頁の(1)(b)
4	L691	Okinawa Road Map/ Okinawa	1:100,000	1957-60	
5	L691	Ryukyu Retto (PAO-1945)	1:100,000	1945	『沖縄県史、資料編 12』(2001: 77-78) の(1)(d)
6	L891	Ryukyu Retto	1:25,000	1944-62	島袋 (2006: 71) に索引図
7	L897	Ryukyu Retto	1:25,000	1971-72	
8	L091	Ryukyu Retto Photomaps	1:25,000	1944	『沖縄県史、資料編 12』(2001: 77-78) の(1)(c)
9	L891	(L091 Photomaps on back)	1:25,000	1944-45	『沖縄県史、資料編 12』(2001: 77-78) の(1)(c)
10	L893	Okinawa Special (322 sheets)	1:4,800	1949-51	島袋 (2006:73) に索引図、琉大地理学教室の試験的公開画像、本稿で紹介
11	L091-S	Okinawa Photomaps	1:5,000	1948-56	
12	L776	Japan, including Okinawa	1:50,000	1974-82	AMS ではなく DMA 作製
13	L791	Ryukyu Retto	1:50,000	1944-54	『沖縄県史、資料編 12』(2001) 口絵 A-H、『空から見た昔の沖縄』(2002)
14	L093	Okinawa Photomaps	1:50,000	1955	
15	L93-S	Okinawa Photomaps W/Soil	1:50,000	1947-48	

資料:アメリカ公文書館 II (NARA II) 3 階の Cartographic and Architectural Room 備え付けの目録、Record Group 77、“AMS by Country” による。DMA は AMS の後身の Defense Mapping Agency をさす。

(d)用紙 2 枚にわたる縮尺 10 万分の 1 の道路・計画地図。地勢及び地形の特徴が明記される。方眼はなし。

さらに 8. L091 Ryukyu Retto Photomaps (1: 25,000) および 9. L891 (L091 Photomaps on back) (1: 25,000) は、やはり『沖縄県史、資料編 12』(2001) の上記リストの(1)(c)になると考えられる。その説明はつぎのようになる。

(c)縮尺 2 万 5 千分の 1 の戦術用地図。幾分かの地勢と地形の特徴と水路について、敵軍施設、海岸及び海岸の色分けが明記される。200 ヤード四方及び 1,000 ヤード四方の番号が付された攻撃目標指定方眼がオーバープリントされる。戦術用地図の裏面には同地域の縮尺 2 万 5 千分の 1 写真地

図が掲載される。

すでに触れたように、3. L096 Ryukyu Retto Photomaps (1: 10,000) の元図になった図である。沖縄県公文書館がインターネットを通じて画像を公開している「アイスパーク作戦(沖縄戦)戦術用地図」は書誌データが少なく、縮尺も示されていないが、地図と空中写真を組み合わせたものである点にくわえ、一枚の図(写真)のカバー範囲から、この 8. L091 Ryukyu Retto Photomaps (1: 25,000) および 9. L891 (L091 Photomaps on back) (1: 25,000) と判断される。現在画像が公開されている範囲は沖縄本島の海岸部が多く、今後の充実が期待される。

つぎに表 1 で戦中期から戦後期の年代が示されているものをみると、まず 6. L891 Ryukyu Retto

(1: 25,000) は、その名称と縮尺から島袋 (2006:71) に索引図が掲載されている”RYŪKYŪ RETTŌ 1: 25,000”に相当する可能性が高いと考えられる。その年代が 1944 年から始まっているのは、9. L891 (L091 Photomaps on back) (1: 25,000) の系譜をうけつぐ地図と位置づけられているからであろう。島袋 (2006:71) の索引図に記されている注記では、1949 年 1 月の空中写真によるとしているが、水平的・垂直的な基準点は、日本の陸地測量部が確定した 1927 年のデータによるとしている。この地域の陸地測量部の三角測量は 1914(大正 3)～1921 (大正 10) 年に(測量・地図百年史編集委員会 1970: 82-83)、地形測量は 1919 (大正 8) と 1921 (大正 10) 年におこなわれており(清水 1999)、それらの成果にもとづくデータを地理調査所(陸地測量部は 1945 年 8 月末日に陸軍を離れ、9 月 1 に地理調査所と改称し内務省所管となった)より入手したと考えられる。

つづく 13. L791 Ryukyu Retto (1: 50,000) は、『沖縄県史、資料編 12』(2001) の口絵 A-H ならびに『空から見た昔の沖縄』(2002) の各所に部分が掲載されているものにあたりと考えられる。この図群の図が 1945 年以降にも作製されたことになっているのは、他の地域の図の作製が遅れたからと考えられる。国立国会図書館の AMS 作製図の目録のうち”L791”の図(5 万分の 1)を見ると、奄美諸島などについては 1950 年代になってから作られていることがわかる。

ところで、『沖縄県史、資料編 12』(2001) の口絵の解説では、この図群の多くは 1944 年 9 月撮影の空中写真と米海軍の水路図によるものとされている。アメリカ軍海兵隊の沖縄戦史第 2 章「ICEBERG 作戦の準備」の情報の節にふれられている、1944 年 9 月 29 日の B29 による空撮が(Nicholas and Shaw 1955: 20) この 9 月の撮影にあたりと考えられる。沖縄本島とその周辺の離島を空撮したが、とくに本島北部は雲に覆われたところが多く、もとの図に空白部分が多くなったとする記述は、『沖縄県史、資料編 12』(2001) の口絵 A-H にみられる空白部分の分布と一致する。

以上からすると、戦中期に作られた地図群については、多くが沖縄県などの関係者によってすでに把握されていることが明らかである。ただし、作製範囲などについては、わかっている場合が少なく、今後の検討が必要である。

なお関連して、沖縄戦前後の空中写真について

は、すでに所在確認が開始されていることを付記しておきたい。当山 (2001) がそのリストを示しており、1944 年 9 月 29 日撮影のものも、国土地理院や沖縄県庁に収蔵されていることがわかる。ただし両者の収蔵する空中写真には、欠けている部分が多いとされており、アメリカ公文書館 II に収蔵されていると考えられるネガロールの調査が改めて必要となろう。

さらに作製年代が戦後とされているもののうち、琉球大学法文学部地理学教室が一覧図ならびに所蔵図の画像をインターネットで公開しているものについてみておきたい。まず、2. L893 Okinawa Special (322 sheets) (1:10,000) は、琉球大学の一覧図の説明に示す年代が表 1 に示した年代と違うが、同じ図群番号(L893)と縮尺から、同一図群と考えられる。さらに 10. L893 Okinawa Special (322 sheets) (1: 4,800) も、やはり年代に少し差があるが、琉球大学のサイトが示すもうひとつの一覧図(AMS MAP “OKINAWA 1/4,800”)から検索できるものと同一図群と考えられる。

なお、以上の 2 図群に表 1 の 1. L893 Okinawa Special (322 sheets) (1: 1,200) をくわえると、縮尺の違う 3 図群がおなじ図群番号(L893)をもつことになる。これらは相互に関連するものとして作製され、3 者をあわせて全 322 図幅になることが推測される。島袋 (2006:73) に索引図に見られる図幅の総数と琉球大学の公開している一覧図(AMS MAP “OKINAWA 1/4,800”)は総図幅数が 218 と一致しており、322 から 218 を差し引いた 104 図幅が、同じ図群番号を持つ 1 万分の 1 図と 1,200 分の 1 図の図幅の合計になる可能性がある。と当面は考えておきたい。

以上、アメリカ公文書館(NARA II)の 3 階の Cartographic and Architectural Room 備え付けの目録を手がかりに、戦中・戦後期の琉球列島に関連する AMS 作製図を概観した。これをふまえ、さらに 10. L893 Okinawa Special (322 sheets)(1: 4,800) について検討を加えておきたい。

2. 4,800 分の 1 沖縄本島中南部地形図について

表 1 に示した地図群のうち、10. L893 Okinawa Special (322 sheets) (1: 4,800) を、古書として 42 図幅購入した。この書誌データを表 2 に示している。すでに触れているように、琉球大学法文学部地理学教室ではこの画像をインターネットを通じて公開している。この公開画像には、一部欠落

がみとめられ（全 218 面のうち 14 面）、その部分が購入図に含まれているのではないかと期待されたが、残念ながらそれにあたるものは見られなかった。ただし、この 4,800 分の 1 図を収蔵する機関は、国内では琉球大学以外にはないようなので、希少な地図として現物を確保することは意義あることと考えている。今回の購入図のカバーする地域については、島袋（2006）の示す索引図に表 2 の図番号を位置づけてご覧いただきたい。

なお、この図群はアメリカ合衆国では上記国立公文書館Ⅱのほかアメリカ議会図書館も収蔵する。今後両館を訪問する機会を待って、とくに琉球大学法文学部地理学教室のコレクションに欠落する図幅の探索に努めたい。

つぎに本図群の作製に関する点に注目しておきたい。本図群の各図に下に印刷された注記にから、作製に用いた空中写真は 1947 年の 10 月、11 月ならびに 1948 年 1 月の撮影ということがわかる。当時は沖縄本島の基地群の造成工事が盛んにおこなわれており（島川 2013）、そのための地図作製につながる空撮であったと推定される。すでに沖縄戦の最中から日本本土攻撃に向けた基地造成が沖縄本島中部では開始され（Dod 1966: 657-660）、その拡充にむけて沖縄戦の準備のために撮影・作製された戦闘用の空中写真や地図とは別に、あらたに建設用の空中写真や地図が必要となり、このような大縮尺図が作製されたとみられる。本図群の各図の作成（編集）年が、とくに航空基地の集中する沖縄本島中部について 1948 年と早いのは、そうした事情を反映するものであろう。

なお、空中写真の図化に必要な基準点は、すでにみた 6. L891 Ryukyu Retto (1: 25,000) と同様、陸地測量部が 1927 年に確定したデータによるとしている。日本側のデータで十分な精度が確保できる場合は、技術だけでなく、時間や人手もかかる三角測量を避けるのは当然と考えられたことがうかがえる。

なお、これらの地図の製図・印刷は、6. L891 Ryukyu Retto (1: 25,000) の場合と同様に、それを担当した第 64 工兵地形大隊 (The 64th Engineer Topographic Battalion) の根拠地であった東京新宿の伊勢丹ビルでおこなわれたと考えられる。戦中期の地図も作製した、東京進駐前の同大隊の根拠地はどこであったかも含め、さらに検討が必要である。

近年、日本本土についても AMS による地形図に対する関心が高まっている。各種の地形図のほか、作製を担当した第 64 工兵地形大隊の活動の紹介もおこなわれるようになった（小川 2008、長谷川 2009a, b、赤木 2010）。AMS による地図は、本土についても戦中・戦後期の景観変化を考えるに際し少なからぬ意義を持つと考えられ、今後それらを利用した本格的研究に至るには、さらにその全容の把握に向けて努力が必要と考えられる。とくに地図が作られた地域や時期、特色について十分な資料を整備し、多様な分野の研究者の要請に応えられるような体制を構築することが要請されている。

文献

- 赤木祥彦 2010. 「米軍がつくった戦争時の日本地図」
地理 55(1): 9-51.
- 小川那瑠 2008. Japan city plans “Nihonbashi”. 国立国会図書館月報 573: 2-3.
- 籠瀬良明 1972. 「沖縄の地形図」地図（日本国際地図学会）10(2): 10-17.
- 鍬塚賢太郎 2007. 「アジア地域における旧米国陸軍地図局作成地図 (AMS マップ) の特徴と利用可能性」
地理科学 62(3): 216.
- 小林茂 1999. 「地形図と南西諸島の近代」『「大正昭和琉球列島地形図集成」解題』柏書房、27-33.
- 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部資料編集室 2001. 『沖縄県史ビジュアル版 10、空から見た昔の沖縄、沖縄島中部・南部域の空中写真』沖縄県教育委員会.
- 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部資料編集室 2002. 『沖縄県史、資料編 12、アイスバーグ作戦、沖縄戦 5（和訳編）』沖縄県教育委員会.
- 島川雅史 2013. 「沖縄戦と土地収用」前田哲男・林博史・我部政明編『〈沖縄〉基地問題を知る事典』吉川弘文館、2-5.
- 島袋伸三 1988. 「沖縄の地形図」南島の地名 第 3 集: 78-87.
- 島袋伸三 2006. 「沖縄県下の米軍製地図について」外邦図研究ニューズレター4: 969-73.
URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/newsletter4/pdf/n4_s3_2.pdf
- 清水靖夫 1999. 「沖縄県の地形図について」『「大正昭和琉球列島地形図集成」解題』柏書房、3-22.
- 清水靖夫 2000. 「沖縄県の地形図類」地図ニュース（日本地図センター）334: 7-10.

- 測量・地図百年史編集委員会編 1970.『測量・地図百年史』日本測量協会.
- 当山昌直 2001.「沖縄の古い空中写真に関する調査作業ノート」資料編集室紀要（沖縄県教育委員会）26: 241-244.
- 長谷川敏雄 2009a.「戦後の伊勢丹で米軍が地図を作っていた！(1)伊勢丹の接收」地図中心（日本地図センター）437: 30-31.
- 長谷川敏雄 2009b.「戦後の伊勢丹で米軍が地図を作っていた！(2)伊勢丹時代の地図部隊」地図中心（日本地図センター）438: 32-34.
- 読谷村役場総務部企画課編 1995.『平和の炎 vol.8.〔沖縄戦直前米軍資料全翻訳〕』読谷村.
- Dod, K.C. 1966. *The Corps of Engineers: The War against Japan*. Office of the Chief of Military History, United States Army.
- Nicholas, S., Jr. and Shaw, H.I., Jr. 1955. *Okinawa: Victory in the Pacific*. U.S. Marine Corps Historical Monograph.
URL: <http://www.ibiblio.org/hyperwar/USMC/USMC-M-Okinawa/>

表2：4,800分の1沖繩本島中南部地形図目録（大阪大学蔵）

米軍作成の沖繩地形図		東経										北緯						備考	
図番号	図幅名	縮尺	作成者	作成年	空中写真	Field Control	度	分	秒～	度	分	秒	度	分	秒～	度	分		秒
1	BOLO POINT WEST	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	42	0	127	43	0	26	26	00	26	27	00	
2	BOLO POINT EAST	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	43	00	127	44	00	26	26	00	26	27	00	
24	KURUTAKE	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	47	0	127	48	00	26	24	00	26	25	00	
29	KINWAN	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	52	00	127	53	00	26	23	00	26	24	00	
30	TENGAN	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	51	00	127	52	00	26	23	00	26	24	00	
31	KONBU	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	50	00	127	51	00	26	23	00	26	24	00	
32	TENGANGAWA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	49	00	127	50	00	26	23	00	26	24	00	
45	YUNABARUGAWA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	49	00	127	50	00	26	23	00	26	24	00	
47	KAWASAKI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	50	00	127	51	00	26	22	00	26	23	00	
48	AGENA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	51	00	127	52	00	26	22	00	26	23	00	
53	AKAMICHI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	49	00	127	50	00	26	21	00	26	22	00	同一の図幅が2枚ある
64	KOZA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	48	00	127	49	00	26	20	00	26	21	00	
65	MIYAZATO	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	49	00	127	50	00	26	20	00	26	21	00	
68	HAEBARU	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	52	00	127	53	00	26	20	00	26	21	00	
93	YABUCHI-SHIMA SOUTH	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	55	00	127	56	00	26	18	00	26	19	00	

米軍作成の沖縄地形図		東経										北緯					備考		
図番号	図幅名	縮尺	作成者	作成年	空中写真	Field Control	度	分	秒～	度	分	秒	度	分	秒				
101	FUTEMA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1948	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	46	00	127	47	00	26	17	00	26	18	00	
114	OKUMA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1948	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	46	00	127	47	00	26	17	00	26	18	00	
118	MACHINATO	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1948	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	43	00	127	44	00	26	15	00	26	16	00	
120	KAKUBUGAWA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1948	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	15	00	26	16	00	
147	UMINO	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	48	00	127	49	00	26	11	00	26	12	00	
149	TOSO	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	46	00	127	47	00	26	11	00	26	12	00	
154	MADANBASHI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1949	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	11	00	26	12	00	
174	SASHIKI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	47	00	127	48	00	26	09	00	26	10	00	
179	KOGUSHIKU	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	42	00	127	43	00	26	09	00	26	10	00	
180	TAKETOMI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	09	00	26	10	00	
181	WONAGA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	40	00	127	41	00	26	09	00	26	10	00	
183	IHO-JIMA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	39	00	127	40	00	26	08	00	26	09	00	
185	ZAHA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	08	00	26	09	00	
197	GUSHICHAN	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	44	00	127	45	00	26	07	00	26	08	00	
199	YOZADAKE	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	42	00	127	43	00	26	07	00	26	08	00	

米軍作成の沖縄地形図		東経										北緯										備考
図番号	図幅名	縮尺	作成者	作成年	空中写真	Field Control	度	分	秒～	度	分	秒	度	分	秒	度	分	秒	度	分	秒	
200	OZATO	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	07	00	26	08	00				
201	ITOMAN	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	40	00	127	41	00	26	07	00	26	08	00				
203	NAGUSHIKU	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	39	00	127	40	00	26	06	00	26	07	00				
205	MAKABE	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	06	00	26	07	00				
207	NAKAZA	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	43	00	127	44	00	26	06	00	26	07	00				
208	HANAGUSUKU	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	44	00	127	45	00	26	06	00	26	07	00				
211	MABUNI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	44	00	127	45	00	26	06	00	26	07	00				
213	KOMESU	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	41	00	127	42	00	26	05	00	26	06	00				
214	TSUKAZATO	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	40	00	127	41	00	26	05	00	26	06	00				
215	KIYAN	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	39	00	127	40	00	26	05	00	26	06	00				
216	KIYAN-MISAKI	1: 4,800	the 64th Engineer Base Topographic Battalion (第64工兵地形大隊)	1951	1947年10月、11月、 1948年1月撮影の空中写真	71th Engineer Survey Liaison Detachment	127	39	00	127	40	00	26	04	00	26	05	00				

北清事変に際して作製された2万分の1「山海関」地形図（大阪大学蔵）

—解説と目録—

解説：小林 茂（大阪大学名誉教授・大阪観光大学）

目録：小林 基（大阪大学文学部学生）

日本陸軍は、19世紀末～20世紀初頭にかけて、中国大陸（旧満洲〔以下満洲という〕も含む）、朝鮮半島北部、さらに北樺太の各地で2万分の1地形図を作製した（清水2009: 179-181、小林ほか2012）。その多くは、日清戦争や日露戦争に際して、戦場やその後方の地域について作製されたもので、戦時という特殊状況を利用したものと考えられる。

このグループの地図と位置づけられる「山海関近傍」全15図幅を、この度2012年度科学研究費により古書として購入することができた。これらについて、すでに入手していた関連情報（小林2011: 106-107）にもとづきつつさらに調査をおこなったところ、その作製の背景がかなり明確になり始めることになった。測量（1900年）から刊行（1901年）までが短期間に進んだのもこの背景を反映していると考えられ、作成経過が不明の場合が多い外邦図には珍しい例といえる。以下ではこれらの点について報告するとともに、「山海関近傍」図全15点の目録を示したい。

1. 2万分の1地形図が作製された時期と地域

上記のような、縮尺2万分の1の外邦地形図が作成された地域については、すでに1940年3月発行の「外邦局地図一覧図（其一）」（小林ほか2010: 58参照）にしたがって一覧表を示しているが（小林ほか2012: 61）、これに1944年発行の「内邦地域地図整備目録」（長岡1993参照）に記載されている朝鮮半島北東部の2万分の1地形図（清水2009: 179-181）もくわえて、それぞれの地図群の測図時期、発行時期、図幅数を示したのが表1である。ここではまず表1を検討しながら、このグループの図の全容をみてみたい。

なお朝鮮半島北東部の2万分の1地形図は、日露戦争直後の1906～1907年に測図されたものであるが、のち韓国併合（1910年）により、カバーする地域が植民地になったために「内邦地域地図整備目録」に一覧図が掲載されることになったものである。従って、測図当時は「外邦局地図一覧図（其一）」に一

覧図が掲載された地図群と同じグループに属していたと考えて差し支えない。

測図年が判明していない地図群が少なくないが、判明しているものでは、19世紀末～20世紀初頭に集中する。また刊行年も多くはその時期であるが、これよりやや遅れる場合も見られる。

このように2万分の1図が集中してあられる背景については、本格的検討が必要であるが、1885（明治18）年に定められた「戦時測量班服務規則」の第3条に「測量地圖ノ比例尺ハ總圖ニ在テハ五萬分一分圖ニ在テハ二萬分一トス但シ樞要陣地ノ如キ精密ヲ要スルニ方テハ一萬分一或ハ其以上ノ例尺ヲ用ユルコトアリ」とあり、この分図の縮尺に準じて作製された可能性が大きいと考えられる。なお、「戦時測量班服務規則」は1882年に定められ、さらに1884年に改定された「戦時測量班服務假概測」をうけつぐもので、戦時期の測量班について、その目的や組織上の位置づけ、構成、適用する測量技術、構成員の任務分担を規定する（内閣記録局編1890: 554-559）。そこでは、総図だけでなく分図についても、測量に際しては基本的に平板（「小測板」）を、細部（「碎部」）の測量では画板に似た「携帯圖板」を用いるよう指示されている。平板上では水準器つきアリダード（「アリダードニベラトリス」）ならびにコンパス（「デクリナトアール」）、携帯図板上では小コンパス（「小デクリナトアール」）を用いることとなっていた。くわえて高度差をみるために「測山驗氣器」（気圧高度計と考えられる）を携帯すべしとしている。

なお、1941年に陸地測量部員として外邦測量の変遷を検討した高木菊三郎は、1907（明治40）年以降、その基本縮尺は10万分の1になったとしている（高木著・藤原編1992: 29-30）。さらに検討の余地があるが、2万分の1の縮尺は、この時期までの測量について適用され、以後はほとんど適用されなくなったと推測される。

三角測量を適用したものではないが、これらの2万分の1地形図は、小地域をカバーする地図群として十分な精度をもっており、また比較的大縮尺であ

表 1：19 世紀末～20 世紀初頭に作製された 2 万分の 1 地形図

番号	名 称	測図年	発行時期	図幅数
1	北樺太アレキサンドロフ近郊	不明	1906	4
2	山海関近傍	1900 年	1901 年 2 月 18 日	15
3	威海衛近傍	不明	1899 年	24
4	天津付近	不明	1913 年	12
5	保定近傍	不明	1923 年	9
6	漢陽以西漢水右岸地区	不明	1915 年	6
7	二万分一香港近傍	不明	1925 年	24
8	遼陽近傍	1904 年 11 月	1905 年 4 月 3 日	23
9	得利寺近傍	1905 年 2 月	1905 年 6 月	17
10	鳳凰城近傍	1904 年	1905 年	8
11	九連城近傍	1895, 1898, 1904 年	1895, 1896, 1898, 1904 年	14
12	析木城近傍	不明	1905 年	10
13	大石橋及蓋平近傍	1895, 1905 年	1905 年 5 月	26
14	營口近傍	不明	1905 年	4
15	海城近傍	不明	1905 年	15
16	図們江口会寧近傍、ただしのちに東側 139 図幅が羅津要塞近傍とされた	1906, 1907 年	不明	171

るところから、作図された地域の景観をよく記録すると考えられる。筆者らがこの縮尺の地図群に注目し、収集してきたのは（小林ほか 2012）、これらを収蔵する機関がほとんどないことにくわえ、その精度や景観表現に注目するからである。

ところで、表 1 にみえる図群には、日清戦争・日露戦争の戦場を戦闘終了直後に測量しているものが少なくない。3. 威海衛近傍、8. 遼陽近傍、9. 得利寺近傍、10. 鳳凰城近傍、11. 九連城近傍、13. 大石橋及蓋平近傍などがそれにあたる。これらは、『明治廿七八年日清戦史』さらには『明治三十七八年日露戦史』の付図と一致する場合が少なくないところからすると、戦史用に作製された可能性が大きい。これに対して本稿で紹介する山海関に関する 2 万分の 1 地形図は、戦史用というより、別の役割を持っていた可能性が大きい。つぎにこの点について検討してみよう。

2. 北清事変における連合軍の山海関占領

表 1 にみえる 2 万分の 1 「山海関」地形図の測図年は 1900 年であり、北清事変（義和団事件）に際し

ての日本軍の出兵に関連するものであることがうかがわれる。北清事変に際して日本軍は連合軍の一員として出兵し、その山海関占領にも参加した。まずこの経過からみよう。

連合軍による北京陥落（1900 年 8 月 14 日）以後、義和団の掃討がおこなわれたが、占領は長期化すると考えられ、冬にそなえて戦略的要地山海関の占領が考えられるに至った。その大きな理由は山海関およびその南の秦皇島付近は、冬でもつよい季節風のため基本的に結氷せず、外部との連絡のための港湾として確保することが必要になったためである（参謀本部編 1904: 75-76、斎藤 2006: 294-299）。

9 月 29 日の連合軍艦隊司令官の会議でこれが決定されると、各国軍の進出が開始され、日本軍も海軍の陸戦隊 120 名を 10 月 2 日に山海関の定遠砲台付近に上陸させ、さらに陸軍の 2 中隊 230 名をやはり海路で送り、陸戦隊と交代させて占領を開始した。さらに 10 月 10 日に新派遣隊を送り、先に送った 2 中隊と交代させたほか、12 月 1 日にも少人数を送った。ただし日本軍は北清事変に際して派遣した兵員の多くを帰国させており、山海関に兵員を十分にふ

りむけることができず、その占領に関与した連合国のなかでは、少数を占めるに過ぎなかった。しかし冬が深まるとともに他の寄港地の結氷により、輸送拠点としての山海関の役割大きくなり、補給・通信関係の兵員が派遣された(参謀本部編 1904: 76-101)。

このような日本守備隊の駐留に関連して興味深いのは、12月3日の第五師団長山口素臣に対する報告で、限られた範囲ではあるが、山海関付近の2万分の1の「目算測圖」を添付している点である。地形や道路、市街地、堡壘の位置を図示しつつ、各国の占領箇所を示すもので、早くも10月に2名の将校の作業により作製されたことがわかる(アジア歴史資料センター資料「12月3日諸情報の摘要目算測図」Ref. C10071255700)。目算測図とは、コンパスで方位を確認し歩測で距離を測るような簡易測量で、偵察などに際し広くおこなわれたと考えられる(小林 2011: 131-133)。

なお、山海関の占領は各国によって軍事的な既得権と考えられ、その守備隊はその後も駐留を続け、1908年6月の報告によれば、フランス・イギリス・イタリアがなお山海関と秦皇島に少数の兵を置いていた(アジア歴史資料センター資料「第2号清駐軍北新(清の誤記)駐屯列国軍兵力並將校人名の件」Ref. C03022921500)。また山海関の日本軍守備隊をめぐってはたびたび紛争が発生しており、とくに1933年1月1日には、続く「熱河作戦」の前哨戦のようなかたちで、山海関の占領にいたる「山海関事件」が発生した点も留意される(安井 2003: 80-82, 125-126)。

3. 測図班の派遣

以上のような1900年秋の山海関への守備隊派遣にあわせて、陸地測量部の測図班の派遣が指令されたのは9月8日で、同13日頃には広島の子品港を出発し、天津で第五師団兵站監の秋山好古大佐(秦編 2005: 7)の指示する地域の測量に従事するよう指示された。指揮者の玉井清水大尉ほか15名という構成で、うち測量手は9名であった(アジア歴史資料センター資料「玉井大尉以下9名北清地方へ出張手当追給方申進の件」Ref. C09122721700)。その構成を表2に示している。玉井はこの時期長崎要塞で測量手18名と測量に従事しており(アジア歴史資料センター資料「33年10月4日、陸地測量部班長陸軍歩兵大尉玉井清水以下別紙の通測量の為め長崎要塞へ出張の件」Ref. C10127011200)、その半数をつれて出

発することになった。

なお以上の構成は、すでに触れた戦時測量班服務規則の第2条にほぼ沿うものであったと考えられている。そこでは班長(大尉)1名、一等測手(中[少]尉)2名、二等測手(文官)8名、書記(下士)1名、図手(文官)2名、印刷手(文官)2名とされている。

さて、このような測図班の主な測量地域は、岡田扇太郎の回想によれば、海岸部(塘沽)から北京に至る幹線道路の左右それぞれ4千メートルの範囲で、護衛兵にともなわれての作業となった(アジア歴史資料センター資料「外邦測量の沿革に関する座談会の件(1)」Ref. C04121449200)。また玉井大尉が腸チフスにかかったという。なお、岡田は5万分の1の縮尺による測図であったと回想しているが、表1の4.天津付近の図からすると、2万分の1の縮尺でも測量がおこなわれた可能性もあり、さらに検討を要する。

表2: 測図班の構成

職	氏名	陸地測量部修技 所入所卒業年次
陸軍歩兵大尉	玉井清水	—
陸地測量手	市川元作	—
	新井季吉	—
	松井哲次郎	—
	岡田扇太郎	—
	鈴木敏	—
	大西鍬?太郎	2期、1891卒
	菊池馨	5期、1897年卒
	大門敏三	—
	横瀬市造	5期、1897年卒

注: 陸地測量部の入所・卒業年次は、日本測量協会編(1952)による。

表 3：山海関附近偵察報告

篇	篇・章・節のタイトル	付図および参照図
第一篇	山海関附近一般ノ状況	
	第一章 山海関ノ位置及氣候	
	第二章 地形ノ略説	
	其一 関内	
	其二 関外	
	其三 附近一般	
	第三章 現在ノ防禦編成	
	其一 一般ノ要領	第一図
	其二 東方面ノ防禦	第二図、第三図、第四図
	其三 西方面ノ防禦	第五図
	其四 海方面ノ防禦	第六図、第七図、第八図、第九図
	其五 困廓ノ防禦	第十図
	第四章 要塞ノ兵備	第六図、第七図、第八図、第九図
	第五章 要塞ノ兵力	
	第六章 交通	
	其一 鉄道	
	其二 電信	
	其三 道路	
	第七章 徴發物件	
	其一 宿営力	
	其二 給養力	
	其三 運搬材料	
第二編	山海関ノ攻略及攻略後ニ於ケル諸般ノ設計	
	第八章 山海関及其附近ニ於ケル上陸点ノ撰定並其設備	
	其一 上陸点ノ撰定	第十一図、第十二図
	其二 上陸ノ設備	
	第九章 山海関ノ防禦ヲ撃破シ之ヲ占領スル為メノ計畫及之ニ用フル兵力ノ大小種類	第十三図、第十四図
	第十章 山海関若クハ其附近ニ上陸シ直隸平野若クハ滿州ニ向テ作戰スル軍ノ根拠地ノ撰定	第十五図、三十万分一図参照、第十六図
	第十一章 山海関若クハ其附近ニ撰定シタル根據地ヨリ東西方向ニ進出スル難易ノ判断及進出ノ計画	第十五図、第十六図
	其一 西方ニ向テノ進出	
	其二 当方ニ向テノ進出	
	第十二章 上陸点ト鉄道ト連絡ヲ要スルノ有無又之ヲ要スレハ其設計及之ノ関スル材料ノ調査	第十七図、第十八図

注(1) アジア歴史資料センター資料「北清視察報告、陸軍歩兵中佐明石元二郎、陸軍砲兵少佐筑紫熊七、陸軍歩兵大尉西川庸次郎」Ref. C09122606900, C09122607000, C09122607100, C09122607200, C09122607300, C09122607400, C09122607500, C09122607600, C09122607700, C09122607800, C09122607900, C09122608000, C09122608100, C09122608200, C09122608300) による。

(2) 冒頭の目次と本文の表題が違う場合は、後者を優先した。

4. 山海関附近での測量とその成果の意義

このような測量班から測量手2名を、山海関付近の測量のため歩兵少佐明石元二郎のもとに派遣するよう玉井大佐に指示が出されたのは10月15日であった（アジア歴史資料センター資料「山海関附近測量従事測量手2名明石少佐に附属せしむべき事」Ref. C09122641200）。日付からすれば、日本軍守備隊の山海関到着後間もない頃である。表2にみえる9名の測量手のうち誰が派遣されたのかは不明であるが、その測量が明石少佐らの任務に関わるものであったことに疑問の余地はない。明石らは当時参謀本部第三部員で（秦編2005: 6）、山海関に関連する偵察を指示されていた（斎藤2006: 305-306）。1900年12月に提出されたその報告（明石および陸軍砲兵少佐筑紫熊七ならびに陸軍歩兵大尉西川席次郎の連名による「北清偵察報告」）の主体は山海関に関連するもので（「山海関附近偵察報告」）、その目次を示すと表3のようになる。

表の目次を見るだけでも、山海関およびその附近の予想される軍事行動について、さまざまな想定を

おこないつつ詳しく検討していることがわかる。残念ながらこの報告書には本文に参照が指示される図が添付されていないが、そのほとんどが地図あるいは堡塁の平面図であったことがうかがえる。測図班の測量成果は、こうした図の元図として重要であったことが推定されることになる。

表1に見られるように、ここで紹介する地図群の印刷は、翌1901年1月～2月に発行された。現場に駐留する守備隊のためにも急いで製図されたと考えられる。

なお図1は、以上のような山海関近傍地形図の一覧図、さらに図2は、このうち「山海関」図幅の主要部を示している。清朝末期の山海関の景観を示す図として、本図群が多方面で利用されることが期待される。また、ここに掲載している部分をふくめた本図群は、『明治三十年清國事變戦史、巻5』付載の「山海関附近列國占領位置略圖」（2万分の1）ならびに「秦皇島附近列國占領位置略圖」（5万分の1）（参謀本部編1904: 106-107）の元図として利用されていることを付記しておきたい。

				3 望夫石 (1901)	1 老軍屯 (1901)
13 張家馬攻 (1901)	10 歸堤寨 (1901)	8 十二里舖 (1901)	6 紅瓦店 (1901)	4 山海関 (1901)	2 賀家屯 (1901)
14 牛頭崖 (1901)	11 赤土山 (1901)	9 秦王島 (1901)	7 東李庄 (1901)	5 唐子寨 (1901)	
15 洋河口 (1901)	12 金山嘴 (1901)				

図1：山海関近傍地形図一覧図

注：括弧内は発行年（西暦）。太線内は「一般ニ發賣セス」と注記がある。

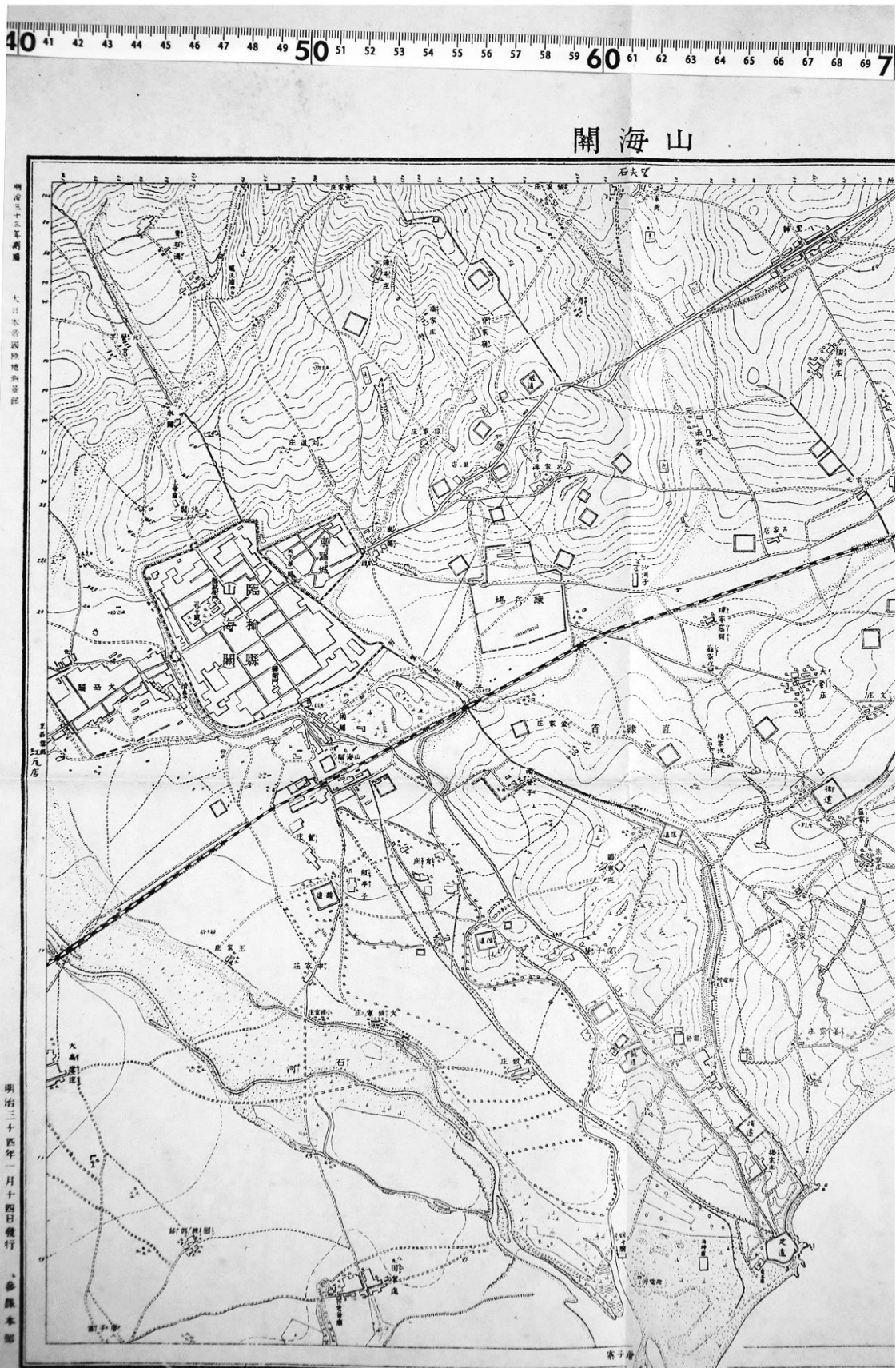


図 2: 2 万分の 1 地形図「山海関」

表 4 : 山海関 2 万分の 1 地形図目録 (大阪大学蔵)

図幅名	縮尺	測図年	測量者	発行年月日	発行者	サイズ (cm)	備考
老軍屯	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 45.6	
賀家屯	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.7 × 45.8	
望夫石	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年?	参謀本部 か? (「部」の 文字のみ 読み取れ る)	57.8 × 45.9	発行年月日は判 読困難だが、「十 四年」という文 字は読み取れ る。
山海関	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 1 月 14 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	
唐子寨	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	
紅瓦店	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 ■ 月 14 日発行 (■は 不明)	参謀本部	57.8 × 45.6	
東季庄	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 45.5	
二十里舖	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	
秦王嶋	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 28 日発行	参謀本部	58.0 × 45.4	
歸堤寨	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.6	
赤土山	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 46.0	
金山嘴	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 46.0	
張家馬攻	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.9	
牛頭崖	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 45.4	
洋河口	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	

文献

小林茂 2011. 『外邦図 : 帝国日本のアジア地図』 中央公
論新社 (中公新書 2119).

小林茂・小嶋梓・多田隈健一・顧立舒 2012. 「日清・
日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形
図 (大阪大学蔵)」 外邦図研究ニューズレター
9:59-65.

斎藤聖二 2006. 『北清事変と日本軍』 芙蓉書房出版.
参謀本部編 1904. 『明治三十年清國事變戦史、巻 5』 川
流堂小林又七.

高木菊三郎著・藤原彰解説 1992. 『外邦兵要地図整備

誌』 不二出版.

内閣記録局編 1890. 1988 復刻. 『法規分類大全 46、兵
制門(2)』 原書房.

日本測量協会編 1952. 『陸地測量部修技所、同教育部、
地理調査所技術員養成所卒業名簿』 日本測量協会
秦郁彦編 2005. 『日本陸海軍総合事典 [第 2 版]』 東京
大学出版会.

安井三吉 2003. 『柳条湖事件から盧溝橋事件へ : 一九
三〇年代華北をめぐる日中の対抗』 研文出版.